コードインリバース　～護士の因子～

偽薬

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは遥か未来の話である。

驚異の科学技術を誇るバースコーポレーショが世界を統治していた。

しかし弊害もあった。実験の過程で変異した動物、”リバース獣”を生み出してしまったしまったのだ。

リバース獣は通常の動物より狂暴で、人を襲う事件も多発した。

この事態に対処すべく、バースコーポレーションは新たな生物兵器を開発した。

外見こそ人間と大差無いが、圧倒的な機動力を誇る――――――戦造人間を。

目次

プロローグ
第１話　～暴圧の前兆～ ―― 1
第２話　～暴圧は止まらない～ ―― 7
第３話　～埋め込まれた邪心～ ―― 15
第４話　～暴圧の終焉～ ―― 25
第一章
第５話　～新世代の予兆～ ―― 35
第６話　～発揮される力～ ―― 39
第７話　～その男、驕慢につき～ ―― 45
第８話　～ネクスト・ステージ～ ―― 54
第９話　～生存抗争～ ―― 61
第１０話　～アクトレスと諸刃の拳銃～ ―― 65
第１１話　～水と油と蟲の群れ～ ―― 70
第１２話　アンレスト ―― 79
第１３話　雷神は空を征く ―― 88
第１４話　機械仕掛けのリベリオン ―― 100
第１５話　下町アポカリプス ―― 115
第１６話　天使か悪魔か ―― 126
第１７話　時間よ、凍れ ―― 143

プロローグ

第1話　～暴圧の前兆～

「KYURYYYYYYYYYYYYYYYYY！」
「……チッ」
龍のような風貌で山脈程の体躯を持つリバース獣の最上位種『ウルティマ・リクイダス』。
他のリバース獣とは格が違う。
流石のボイルも苦戦させられた。
「KYUOOOOOOOOOOON！」
開かれたリクイダスの口から無数の光弾が飛び散る。
「つぁあああああああああっ！」
ボイルは、自分に向かってくるそれを全て素手で弾き飛ばした。
後ろに控えている彼の部下達も各々ガードしている。
「うあぁ……」
「……！」
ボイルは戦慄した。
最前線に立ってリクイダスに攻撃を加えていた部下の一人が飲み込まれていたのだ。
といっても口からではない。リクイダスの腹がジェル状に変化していた。
「こいつ、体を液状化させるのか!?」
捕食を終えたリクイダスはボイルに視線をやった。
言葉こそ無いが、まるで非力な戦造人間をあざ笑っているかのようだ。
「一気にケリをつける……お前達全員下がれ！」
「えっ」
戸惑う部下達を他所に、ボイルは両手の平を向けるリクイダスに向け、そこから暴風波を発生させた。
「ぶげっ」

「ＯＯＯＯＯＯＮＮＮＮ……！」
逃げ遅れた部下達を巻き添えにしながらも波は確実にリクイダスの肉を削り取っている。
しかしリクイダスの方が一枚上手だった。完全に細切れになる前に自らの体を液状化させ、地面に潜り込んだのだ。
その様子を見て、ボイルは暴風を止めた。
これ以上続けても無駄と判断したのだ。
「……アアハァアアアアアア」
部下の死骸が散らばった周辺を見渡し、ボイルは深いため息をついた。

その後レーダーからリクイダスの生命反応が途絶えたため、ボイル達は戦場から本部に帰還した。
「惜しかったねぇボイルくん」
「……」
ボイルに労いの言葉をかけているのは上層部の人間だ。
戦造人間ではない普通の人間のため戦闘力は無いに等しい。
しかし、彼には戦力部隊隊長であるボイルよりも強い権力を持っていた。
更に悪いことに、その目はむしろ怒っているようにも見えた。
「また部下を大勢巻き込んだのかね」
「……警告はしました。戦場では一瞬の差が命取りですから」
「そうはいってもねぇ、困るんだよ。新しい戦造人間の生産が追い付かないんだ。それに君のとこのメンバーはそれなりの精鋭揃いなんだし」

「そうですか」
「……まぁ今後は当分残党狩りだけだろうから、気を付けるんだね」
「はい」
あからさまに気のない返事をしながらボイルは去った。
（お前は邪魔なんだよ、ボイル）
上司は内心舌打ちした。
上層部には彼以外にもボイルを嫌う人間は沢山いた。
思い通りに動かないからだ。
「失礼します。」
ボイルと入れ違いに、目に隈がある男が入ってきた。
彼はいわくつきの科学者、ヌクリア。
独断で何かの危険な研究をしており、上層部との癒着がなかったらとっくに解雇されていたであろう男だ。
「試合による例のテスト、実行してもよろしいですね？」
「もちろんだ」
上司はほくそ笑んだ。試合というのはあくまで建前。本当の目的は別にあった。
「頑張って奴を始末してくれよ、次期隊長君……」
そう呟きながら目を落とした電子端末にはとある新人の名前が表示されていた。
『ＣＯＤＥＩＮ（コーディン）』

「おい」
「ああ？」
自室で寝転がっていたボイル。
声のした方に目を向けるととそこには馴染みの顔があった。
ノギという名前の非戦闘員だ。

ボイルとは訓練生時代の同期であったが、戦闘力が規定値に達しなかったために非戦闘員の道を選んだ。
階級こそ違えどボイルとはそれなりの親交があり、それなりの出世もしていた。
「惜しかったな」
「はっ……皆口を揃えてそう言うよ」
「まあそう腐るな。それより、重大な知らせがあってきたんだ」
「……なに？」
「明日、お前と訓練生ナンバー1の二人での試合が行われることになった。上からの命令だ」
「なんだと？なぜ俺がそんなことを」
「さあな。俺にはわからん。よっぽどの実力者らしいけどな」
「なんなんだふざけやがって……」
数秒の沈黙の後、ボイルは捻りだすようにこう言った。
「……わかった、いくぜ。どうせ拒否権はないんだ」
ノギが部屋から去った後、ボイルは屈辱で顔を歪めた。
表面上こそ冷静に振舞ったが、内心激昂していたのだ。
自分が訓練生の相手をさせられるから、というだけではない。
知っていたのだ。
上司達の間で”ボイルを倒せる逸材”がいると噂されているということを。
奴らは俺をつぶそうとしているんだろう。
何も知らない若い芽を摘むのは忍びないが、仕方がない。
この世は結果が全てだ。
一人きりの個室の中、ボイルはおぞましい表情で呟いた。
「……そいつには消えてもらう」

「羨ましいぜコーディン、隊長と試合できるなんてな」
試合当日、訓練生の二人部屋に呑気な声が響いた。
彼の名前はシナプス。訓練生でも上位に入るエリートだ。
「そんないいもんじゃねえよ」
そう言いながら嫌そうな表情を浮かべているこの男こそがコーディン。
訓練生の中でもナンバー1であり、この物語の主人公である。
「大丈夫だって。いくら隊長でも手加減ぐらいはしてくれるだろうし、上に実力をアピールできればそれでいい」
「おいおい、何俺が負ける前提で話してんだよ?」
「なんだよ、意外と乗り気じゃん」
二人は他愛ないささやかな会話で笑った。
二人は互いを信頼していた。
特にコーディンの方は生まれながらの天才。
クリーンな試合なら相手がボイルだとしても勝てる可能性がある。
シナプスはそう踏んでいた。
「さて、そろそろ行こうぜ」
「おう……いやちょっと待て」
ベッドの下の隙間に手を突っ込んでいるコーディン。何かを探しているようだ。
「ヴァイタルコア、確かにベッドの下に入れたはずなんだが……」
ヴァイタルコアとは、戦造人間にとっての必需品だ。
外見は単なる薄い円盤だが、その内部には戦造人間の肉体を守るための特殊な装置が数多く仕込まれている。
「おいおいこんな時に紛失か?呆れた次期隊長だな」
「減らず口叩いてないでお前も探してくれよ!あーやっぱりクローゼットの中かな……」
ぼやきながらベッドから離れるコーディン。
入れ違いにシナプスがベッドの下を覗く。
「んー……?」
その時、シナプスは奇妙に感じた。

　何かが異様だった。
　言葉では形容し難いが、強いて言うなら〝黒〟としか言いようがなかった。
　影とはまた違う黒さだ。
「これは一体……」
　しかし、その違和感はすぐに消えた。
　瞬く間にごく普通の〝空間〟に戻っていたのだ。
　そしてその奥には――――

「おいコーディン！コア、ベッドの下にあったじゃんか！しっかりしろよ！」
「ああ？」
　コーディンは間の抜けた顔で振り返った。完全に拍子抜けだ。
「馬鹿な……隅々まで隈なく探したはず」
「手ぇ隙間に突っ込んでただけじゃねえかよ！ほら、もういいだろ？行ってこい」
　腑に落ちない顔をしながらも、コーディンは試合の舞台に向かった。
　この時、彼はまだ知らなかったのだ。自分が手を入れた〝隙間〟で何が起こっていたのかを。

to be continue…

第2話　～暴圧は止まらない～

ボイルより先に試合の舞台に到着したコーディンは、ヴァイタルコアを胸部に押し当てた。
その瞬間、胸に触れた部分から大量の黒い糸が飛び出し、白タンクトップだけだったコーディンの上半身がたちまち漆黒に染まっていく。
指先から首元まで、顔を除いた全ての体表が黒い繊維に覆われた。
下半身も例外ではない。
ズボンやシューズで隠れていて見えないが、股間や足も余すところなく覆われていた。
これこそが、全戦造人間の共通装備だった。
ただの布のようにも見えるが、圧倒的な強度と柔軟性で戦造人間の肉体を保護している。
装着者の生体エネルギーを吸い上げて構築されたものだ。
戦闘員だけでなく、非戦闘員も同じ装備を着けている。
もっとも戦闘員と非戦闘員のコアは規格が違い、戦闘員用の方は装着者への負担が遥かに大きいため、戦場にいない時は外されていることも珍しくない。
しかし、熟練した戦闘員の中には、常にコアを着けっぱなしにしている者もいた。
現戦力部隊隊長のボイルもその一人だ。

これは試練だ。
試合開始を目前にして、コーディンはそんな考えを抱いていた。
武舞台の周りの客席からの沢山の視線。
特に上層部からの視線を意識せずにはいられなかった。
奴らはきっと俺を見極めようとしているに違いない。
ボイルとは違う強さを見せつけなければ。
保身のためだけではない。

これから起こることは、俺の人生において非常に重要な糧となるはずだ。
これといった理由こそ無いが、コーディンはそう確信していた。
そんなことを考えているうちにボイルも武舞台に上がってきた。

「ただいまより、隊長ボイルと訓練生コーディンの試合を開始します！」
審判の声が響き渡ると同時に、コーディンはボイルに向かっていった。
先手必勝。
それが今のコーディンの信条なのだ。
しかし、ボイルはそれをかわそうともせずに完全にガードしていた。
「大丈夫なんだろうね……」
観客席でボイルの上司が苦い顔をしていた。
コーディンならボイルを倒せるかもしれないと聞いていたからこそ、この試合を企画したのだ。
しかし現状は圧倒的にボイルが有利。
このままでは上司の計画は破綻してしまう。
「なぁに、心配いりませんよ。計算通りならね……」
上司の心配を他所に、隣に座っているヌクリアは怪しげに微笑んでいた。

（くそっ……）
コーディンは焦り始めていた。
実力差は覚悟していたがまさかこれほどとは。
（こんなに厚い壁なのかッ！）

コーディンはボイルの方針に不満を持っていた。
いくら敵を倒すためとはいえ、仲間の犠牲を厭わない戦い方はスマートではない。
だからこそ自分が次期隊長に就任し、方針を変えようと思っていたのだ。
しかし、この有様だ。
ボイルに手も足も出ていない。
このままでは、ボイルに口出しする権利など得られるはずがない。
（いくらなんでも……この厚さはねえだろう!!）
「づりゃぁあああああああああああああああ！」

（若造が……）
ボイルは失望していた。
今回の試合に上層部の悪意を感じていたため多少警戒していたが、実際戦ってみると拍子抜けした。
あまりにも弱すぎる。
わざわざ本気を出すまでもなさそうだ。
「づりゃぁあああああああああああああああああああ！」
コーディンが拳を振りかざして向かってきた。
一方的な展開に焦っているのは明らかだった。
疲労からか、それとも恐怖からか、足取りもふらついている様に見える。
「ふんっ」
ボイルは右手の平をかざし、そこから空気弾を放った。
小さいが、この距離で食らえばどんなに強く踏み込もうと確実に場外に吹っ飛ぶ。
（終わった……所詮クズだな）
ズメキャアッ。

次の瞬間、鈍い音が響いた。
「……うん？」
一瞬、ボイルはそれをコ―ディンが場外に落ちた音かと考えた。
しかし、次の瞬間にその認識が誤りだと悟った。
「……なんだとッ!?」
自分のすぐ横でコ―ディンが拳を地面にめり込ませていたからだ。
音の正体は、武舞台にヒビが入ることで生じたものだった。
「馬鹿な……」
「うおりゃあああああっ!!」
間髪入れずにコ―ディンが第二撃を加えてきた。
彼自身、どうして自分が無事なのかを理解してはいなかったが、とっさに体が動かすことが出来た。
生まれ持っての天才的な素質の賜物だ。
「舐めるなこの餓鬼ッ！」
「うわぁっ！」
大きく振りかぶった拳をボイルに手で払いのけられ、勢いでコ―ディンは吹っ飛ばされた。
たしかしギリギリで場外はまぬがれた。
ボイルも不意を突かれて動揺していたため、腕に力が乗らなかったのだ。
「ハアッハァッ、ふざけた真似を……」
今にも飛び掛からんとしているボイル。
しかし次の瞬間、不思議なことが起こった。
突然ボイルの頭に強い衝撃が走り、横に転倒して頭を勢いよく地面に叩きつけられたのだ。
試合に立ち会っている全員が息をのんだ。
「何が起こったんだ!?今……」
観客席にいたシナプスは絶句した。
「おぉおっ!?」
上司達は驚き半分喜び半分といった様子だった。
観客はもちろん、近くでその様子を見ていたコ―ディンさえも状況

が理解できずにいた。
しかし、ボイルだけは自分が何をされたのかを理解した。
（今、衝撃は斜め下から飛んできた。その方向にあるものは……）
ボイルの目線の先にあるのは、先ほどコーディンの拳によって割れた地面の”隙間”。
（そしてあの触感は……間違いなく俺自身の空気弾そのものッ！）
常識的に考えて、コーディンに放った空気弾がボイルの方に向かってくるなんてあり得ない。
いくらコーディンが天才とはいえ、実戦経験の無い訓練生のパワーで空気弾をはじき返すなど不可能だ。
しかもすぐではなく何秒かのタイムラグがあった。
返ってきた攻撃。時間差。そして”隙間”。
にわかには信じ難いが、仮に自分の立てた仮説が正しいとしたら……
考察が終わる前にコーディンの飛び蹴りがボイルに命中した。
「ぐはぁっ！」
「ふんっ！」
「ぐぅうっ！」
命中しては離れ、命中しては離れる。
所謂ヒットアンドアウェイ戦法だった。
ボイルはスマートで洗練されたコーディンの動きに対応できず、一方的に攻撃を受けている。
（何かわからんが、勝てる！）
もはや形勢は完全に逆転していた。
（こいつ……生かしておけないッ！生かしておけば確実に俺の邪魔になるッ!!）
目を前に向けると、コーディンが眼前に迫ってきていた。
アッパーの体勢だ。
「来るか……」
「づあッッ！……ああ？」
今度はコーディンが驚く番だった。

目の前からボイルが消えていた。
空振りしたはずなのに、一体どこに消えたのか。
「だが次の一手で終了だッ！」
上空から声がした。
見上げると、ボイルは真上に飛び上がっていた。
既に豆粒ほどの大きさにしか見えなくなっている。
その時、コ―ディンはようやく気が付いた。
辺りに不自然な風が吹いていたことに。
ボイルが能力で風を起こし、自分の体を上に運んでいたのだ。
しかし時すでに遅し。
「アアハァァァァァァァァ!!」
雄たけびと共に時速１００ｋｍ重さ１００ｋｇの膝蹴りがコ―ディンの胸に叩きつけられた。
「ぐげっ」
ミシミシッとヴァイタルコアにひびが入り、コ―ディンの意識は黒に塗り潰された。

観客席にざわめきが広がる。
致命傷だった。
いくら戦造人間といえども、ボイルの全力の落下攻撃を食らって耐えられるわけはない。
「そんな……」
「おい、判定はどうした」
引いている審判をボイルは睨みつけた。
「えっ……しょっ、勝者、ボイル！」
これに慌てたのは上層部の人間だ。
頼みの綱のコ―ディン敗北してしまった。
しかも、建前とはいえ練習のための試合で相手に致命傷を与えるな

ど前代未聞だ。
この一件が世に出回れば、バースコーポレーションは多大なバッシングを受けることになるだろう。
「ヌクリア貴様あああああああああ！これはどういうことだ！」
上司の一人が血相を変えてヌクリアの胸ぐらを掴む。
しかしヌクリアの方は悪びれる様子も無かった。
「あぁあぁ残念です。ちょっと予想が外れましたね」
「ちょっと……だと……？もういい！貴様はクビだ！」
そう吐き捨てると、上司たちは足早に去っていった。
しかし、ヌクリアは何故か余裕げだった。
「いいんですよもう……私の計画はこれから始まるんですから」

「ボイル！お前一体どういうつもりだ！」
部屋に戻ったボイルの元にノギが駆けつけてきた。
「なんの話だ？」
「とぼけるな！ナンバー1の訓練生を故障させるなんて！わざとやったんだろう！」
「あぁ…まあ、本気を出し過ぎてしまったかな」
「なんだと貴様ぁ！隊長として、恥を……」
恥を知れ、とノギは言おうとした。
しかし言えなかった。
ボイルがこちらを見ていた。
その目で見つめられるだけで、気力を砕かれるような感覚に襲われた。
「……弱者が恥を語るな」
その一言で、ノギの中で何かがキレた。
「っッ……！もういいッ失望したッ！お前との付き合いも、今日これま

でだッ！」
そう吐き捨て、ノギは部屋を去っていった。
向かった先は病棟。
そこには重傷を負わされたコ―ディンが搬送されており、ノギがその治療を担当することになっていた。

バースコーポレーション本部の最上階に存在する秘密の部屋。
その存在を知る者は誰もいない。
ただ一人、ヌクリアを除いて。
「さて……私のために働いてくれよ」
そう呟くヌクリアの手元には濁った赤色をしているヴァイタルコアに似た円盤。
そしてその目線の先には、一人の少女がベッドに横たえられていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

第3話　～埋め込まれた邪心～

「ひとまず安心、といったところだな」
病棟では、ノギと医師団がコ―ディンの治療にあたっていた。
重傷を負ったコ―ディンだったが、次第に回復しつつあった。
「ノギさん！」
慌てた様子の非戦闘員が駆け込んできた。
「どうした」
「社長からの緊急伝達が……！」
何かを耳打ちされ、ノギは青ざめた。
「なに!?令嬢がヌクリアに……!?」

「……そうか」
コ―ディンを再起不能にした張本人であるボイルにも伝達は伝わっていた。
「すぐ向かう。精鋭部隊を集めろ！」

「さて、これが最後の工程だ。これを終えればもはや君は人間ではない」
「わかってる……」

「しかし令嬢の身でありながら自ら人体改造に志願するとは殊勝な心掛けだね、ミセル」
「私のためじゃない。我が社のため、そして……」
バースコーポレーション令嬢のミセルは喉元まで出掛かった言葉を飲み込んだ。
コーディンのため。

ミセルは以前から戦力部隊がボイル一強になることを危惧していた。
そんな時に、自分と同世代でありながら次期隊長候補と名高いコーディンと出会った。
「ねえ、コーディンはさ、今の戦力部隊のことどう思ってる？」
ある日、ミセルは思い切ってコーディンに聞いてみた。
「ああ？」
突然の質問に困った顔をしながらも、コーディンは答えた。
「少なくともスマートではないな」
スマート。それはコーディンにとっての指標であった。
真に洗練されたパワーは無駄な破壊を伴わないとも考えていたぐらいだ。
「このままだと、戦闘員はどんどん減るだろうな」
ミセルも同感だった。
この時、ミセルはコーディンに惹かれていた。
会う回数こそ少なかったが、自分と同じ考えを共有できる初めての相手だと考えた。
しかし、それと同時に一種の危うさも感じた。
そして今、ミセルの心配が現実のものとなった。
コーディンが再起不能になったのだ。
もし今後ボイルがいなくなったら、主力部隊はたちまち崩壊するだろう。

しかし、もし非戦闘員でも強力な戦闘力を発揮できるようになりさえすれば状況は改善するだろう。
それを証明したい。この身を犠牲にしてでも。
今こうして人体改造を受けているのもそのためだ。

「なんだって？」
感傷に浸っていたミセルはヌクリアの呼び声で現実に引き戻された。
「なんでもないわ。早く終わらせて」
「了解……」
ヌクリアの顔に下品な笑みが浮かんだ。

「……来てくれたかボイル」
「これはこれは社長殿」
バースコーポレーション本社５番塔。その最上階にヌクリアの研究室はあった。
ミセルは人体改造が公認企画だと思っていたが、実際は違った。
全てはヌクリアの越権行為。そして令嬢は囚われの身。
この事態に対処すべく、精鋭戦力部隊と社長が直々に殴り込もうと合流した。
「できれば勝手な行動は慎んでもらいたい。何せ社長は戦造人間じゃあない」
「ふん、どの口が言うか！」
戦造人間でないものの、社長もなかなか胆のすわった男だった。
さすが世界を牛耳る大企業のトップなだけのことはある。
対ヌクリアの作戦はこうだ。
最上階にボイルを含めた戦闘員２０名と社長、残りの戦闘員はヌク

リアが逃げたときに備えて下の階で待機。
全員が配置についたことを確認し、社長達は研究室に突入した。
「ヌクリア！貴様私の娘を……！」
社長は驚愕した。
娘が怪しげな機械をとりつけられてベッドに横たえられていたからだ。
「えっ……？」
ミセルも驚いた。
「どういうこと……？この計画はお父様にも承知のことなのでは……？」
「とんでもない！娘が改造されるなんて、そんな話は一言も聞いておらんぞヌクリアァ！」
「ああ～ッ！そういえば……言い忘れてました。ふっハハハハハハ！」
狭いヌクリアの笑い声が響き渡った。
「ふざけるな！今すぐ娘を開放しろ!!」
「いいですよ」
次の瞬間、ミセルは社長のもとに駆け寄っていた。
「おお、ミセル……ッッ!?」
安堵したのも束の間、社長は顔を引きつらせていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――ミセルの手が自分の腹をえぐっていたのだから。

「!?」

予想外の展開に、側にいたボイルも面食らった。

「えっ……そんな、?、こんなっ……!?」

しかし一番驚き、怯えていたのはミセル自身だった。

手が本人の意思と無関係に動いたのだ。

それも驚異的なパワーで。

「んふふふッ！見ましたねッ？今の彼女のパワー！そして彼女の胸部にあるものこそそのパワーの源であり私の最高傑作！あえて名付けるとすれば〝邪心回路〟ッッ!!」

ミセルの胸元には、確かにヴァイタルコアのようなものが埋め込ま

れていた。
しかし通常のコアが緑色に発光しているのに対し、こちらは濁った赤色をしていたが。
「ミセルッ……どうしてぇっ……」
社長は力なくどさりと倒れこんだ。
「そんな……お父様っ、違うのこれは私じゃ……」
「いーいや！社長を殺したのは他の誰でもない、君だよ！そう、君は既に支配されている!!」
ヌクリアが興奮気味に叫んだ。
「恐ろしいのかい？大丈夫今慣れさせてあげよう！」
いつの間にかヌクリアは拳銃を倒れている社長に向けていた。
「父親の頭蓋骨が砕け散るところを見ッッッ」
しかし、頭が砕け散ったのはヌクリアの方だった。
ヌクリアが発砲するよりも早くボイルの空気弾が命中していたのだ。
「下衆が口を開くな……！」
「うあああ～はは……！」
顔をぐちゃぐちゃに潰されているにも関わらず、ヌクリアは笑っていた。
「かま……わない……！」
ヌクリアはがくがくと震える手をコンピュータースクリーンにかざした。
「なっ……!?」

次の瞬間、ヌクリアが消えた。
死んだという意味ではない。
正真正銘、言葉通りに〝消え失せた〟のだ。
「一体どこに消えた……ッ!?」

倒れた社長に目もくれず、コンピューターに駆け寄ろうとしたボイルの前に立ちはだかる者がいた。
ミセルだ。
「何をなさ……ッ!?」
次の瞬間、ミセルの蹴りが空を切った。
「ミセル様!?」
その場にいた戦闘員達は突然の事態に唖然としていた。
凄まじい衝撃が遠く離れていてもビリビリと伝わってくる。
ボイルはとっさに後退りしたが、もし食らえば大きなダメージを負っていたことだろう。
「ミセル様！」
一人の戦闘員が駆け寄ろうとした。
「一体どうしてしまったので……!?」
べちゃっという音が聞こえ、彼は。
自分の身長はご令嬢よりも大きいはず。
なのになぜ自分の目線は彼女の足と同じ高さしかないのか……？
そんなことを考えてを中断させるかのように、真横でどさりと音がした。
何故か首が動かないから、目線だけを……
「…………!?」
そこにあったのは、首から上がなくなった男の体。
「これはッ……俺の……!?…………ということは……」
目を下に向ける。
そこにあるはずの胴体がない。代わりに冷たい床と生暖かく赤い液体だけがあった。
その意味を認知すると同時に訪れた断末魔の痛みに絶叫せずにはいられなかった。
「ぎ痛だぁアアアいいいいいいいいいい!!俺の首ツッツッひっあああちぎられてるぅぁぁあああああああああああいづのまにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「どうした……だァァァ？」
ミセルが戦闘員の首を見下ろす。
おしとやかなイメージのある普段のミセルとはまるで別人。
悪魔にでも憑りつかれたかのようなおぞましい顔だ。
「どうしたってェェェェェェェ？そんなのわっかんないわよぉぉぉォォォォォォ……わかんないけどぉぉなぁんかぁぁぁ〞HIGH〞ってヤツよねェェエエエエ！」
「ぶ〟っ〟」
ミセルは叫びながら地に転がった戦造人間の首を西瓜のように踏みつぶした。
「見てよコレ！戦造人間の頭ァァァ粉々に砕けちゃった！スゴォォォいパワーよォこれはアアアアア!!」
「撃てぇぇぇぇぇ!!」
見かねた戦闘員達が発砲した。
全戦闘員の共通装備の一つ、〞イレイザー〞。
それは戦造人間のために特殊な銃であり、戦造人間の生命力を材料にエネルギー弾を発射する。
使い手の実力に比例して威力も上がる。
１８名の精鋭達の集中射撃ともなれば、並のリバース獣なら簡単に倒せる代物だった。
しかし、ミセルは違った。
全弾をノーガードで受けて傷一つ負っていない。
「あんた達の威力ってそんなモンなのォ……？」
「……何ッ!?」
「そういえばさァァァ、熟練した戦闘員はイレイザーを介さずにエネルギー波を出せるらしいわよねェェェ……私もやってみようかしらァ」
ミセルが腕を振った瞬間、１８名の戦闘員達の胴体が吹っ飛んだ。
彼らは口を開く暇さえ与えられないまま息絶えた。

「……どうしてそうなったのかは知らんが、大したパワーだ」
しかし、一人だけ生き残りがいた。
ボイルだ。
「こういうのはどうでしょうお嬢様。乱心した令嬢が突如発狂し、戦闘員数名を殺害。しかしその正当防衛として戦力部隊隊長ボイルによって処刑された、というのは……」
口調こそ丁寧だが、その目は殺意に満ちていた。
令嬢を殺して鬱憤を晴らせる。責任も経営側に押し付けることができる。
正に一石二鳥。またとない好機だ。
「あらぁァァ……いいんじゃなあい？」
興奮しているのはミセルも同じ。
今や彼女は人でも戦造人間でもない。もはや殺戮マシーンそのものだ。
膨大な殺気を放ちながら睨みあう二人。
周囲の大気がうねり始めていた。

「応答がありません！」
「一体最上階で何が起こっているんだ!?」
一つ下の階で待機していた小隊は混乱していた。
状況が把握できない。
確かなことは、上から凄まじいパワーを感じるということだけだ。
「くそっ……今日は厄日か？」
訓練生のシナプスもそのメンバーだった。

本来なら精鋭部隊に参加するのはコ―ディンのはずだったが、補欠としてシナプスが呼ばれたのだった。
「俺も無事で帰れるかどうか……！」
シナプスはコ―ディンの、いや、戦力部隊全体の心配をしていた。
なにか、とてつもなく嫌な予感を感じる……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

第４話　～暴圧の終焉～

異変が起こってから既に１０分が経過していた。
上の階から凄まじいエネルギーを感じる。
それも一つではなく二つだ。
二つのエネルギーが激しくぶつかりあっている
そのせいでエレベーターは故障し、精鋭部隊のほとんどが下の階に取り残されていた。
戦闘員の一人がモード変更の操作をし、胸部からヴァイタルコアを取り外した。
ヴァイタルコアには通信機器としての機能も搭載されているのだ。
「ボイル氏からの連絡は？」
「まだ来ていません！」
既に何でも通信を試みているが、いずれも応答なしだ。
「我々が階段で上がります！」
「あっ、おい待て！」
上司の制止を無視して戦闘員４名が階段を駆け上がっていった。
「……うわあああああああああああああああああああ!!」
程なくして悲鳴が響き渡った。
上司が様子を確認しに行くと、そこにはおののいている戦闘員３人と、道を塞ぐ瓦礫だけがあった。
瓦礫の下からは、人の腕と赤い液体がはみ出ている。
「ここはもう無理です……！」
一人が絞り出すようにそう言った。
もう
立ち向かおうとする気力さえもへし折られたようだ。
「一体上で何が起こっているというのだ……」

「くっ……なんて奴だ……！」
ボイルは戦慄していた。
ボイルの空気弾をまともに食らったはずのミセルが無傷で立っていたからだ。
遡ること１０分。
血が広がった最上階でボイルとミセルは向かい合い、互いの様子を伺っていた。
最初に攻撃を仕掛けたのはボイルだった。
西部劇のガンマンの如く、腕を上げると同時に空気弾を発射。
たちまち爆煙が舞い上がった。
「……なんなのォオ？今のさァァァァァ」
ボイルの自信が揺らいだ。
俺の空気弾は並の戦造人間では耐えられない。
既に部下で実験済みだ。
（一体こいつの体はどうなったというんだ……!?）
「それじゃ次はこっちの番……ほらほらほらほらぁっっ!!」
ミセルの反復攻撃（ラッシュ）がボイルを襲った。
「ぐふっ……ッ！」
ボイルの胸骨がきしんだ。
スピードも、パワーも、いかにもお嬢様といった風な華奢な外見に似合わない程に上昇している。
「なんか反応しなさいよぉぉぉぉ隊長さぁぁぁぁぁぁぁん!!」

「ぐおああああっ!?」
ミセルの拳に吹き飛ばされ、ボイルは壁に叩きつけられた。
「さぁぁぁて……とどめ、刺しちゃおうかしらねェェェェェッ！」
「ぐぅぅ……アアハァァァァァァァァ！」
ボイルは力の限り叫んだ。
それと同時に大量の気がボイルの体内から放出される。
「あらァ……まだやれるんじゃん」
「はぁ…はぁっ…よくもこの俺にここまでやってくれたな……！」
密室の中で、強烈な風が吹き荒れた。
「そんなお嬢様には……この、戦力部隊隊長ボイルの真の威力、思い知らせてくれるッッッ!!」
勢いよくボイルが飛び出す。
弾丸よりも速いそのスピードに対応できず、ミセルはその突撃をガードできなかった。
「くぅぅウ……ッ！今までは本気じゃなかったとでも言いたいわけ!?」
吹っ飛ぶ途中で地面に足を立てて体勢を立て直したミセル。
「調子ぶっこいてんじゃあないわよ３５のオッサンがあアアアアアアアア!!」
追撃せんと向かってくるボイルに蹴りを入れる。
威力は相殺され、ボイルが一瞬よろける。
その隙を逃さず第二撃を……――――
「ッッ!?」
ミセルの拳は空を切り、地面に当たっていた。
視界からボイルが消えていた。
普通なら、あの姿勢で攻撃を避けるなど不可能なはず。
だがその瞬間にボイルがどうなったのか、ミセルには見えていた。
彼は空気で自分の体を運び、超スピードで回り込んだのだ。
回り込んだ先は……当然、〝背後〟。
「そらぁッ！」
ボイルの強烈な正拳突きが背中にめり込む。

「ギッ」
　その衝撃と激痛に耐えかね、ミセルはあえなく吹き飛んだ。
「ギアぁアアアアアア……!!」
　勢いのまま地面を転がるミセル。
　その顔からは先ほどまでの余裕は消え、代わりに激しい憎悪がそこにあった。
「ぶっ殺す……!許さないブッ殺すウゥウゥウゥウ!!」
「許さないだと?」
　反撃の姿勢をみせるミセルに対してボイルも身構える。
「こちらは最初から許すつもりなど無い」
「…………」
　数秒の沈黙の後、二人は同時に駆け出し、攻撃に移った。
「こォ　の　下　衆
がァァ
!!」
「アアハァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
　激しい反復攻撃（ラッシュ）のぶつかり合い。
　ゴンゴンという凄まじい音と衝撃波が部屋中に響きわたる。
「アオボォッ……!」
　競り勝ったのはボイルの方だった。
　拳が土手っ腹にクリーンヒットし、ミセルは今にも吐きそうな苦悶の声を漏らしている。
「終わったな……。　結局この俺に風が吹いていたというわけだ」
「くっ……」
　情けなく倒れこんだミセルを見下ろすボイル。
　もはや勝負は明白なように思われた。

だが、違った。
「……自分の勝ちだ。そう思ってるんでしょ？」
ミセルの顔に笑みが浮かんだ。
「……何？」
「確かにあんたは強い……間違いなく最強の戦造人間よ……さっきだって徐々にパワーが増しつつあった……あんな短期間で急成長するなんて正直今の私にも不可能」
淡々と言葉を述べるミセル。
「もしこれ以上戦いが長引いていたら……負けていたのは私の方だった」
その言葉にボイルは疑問を抱いた。
「貴様一体……ッ!?」
ボイルの質問が終わるよりも早く、弾丸がボイルの胸を貫いていた。
「……何だとぉぉオオオオオオオオオオオオ!?」
「かかったわねェ間抜けがァァァァァァァ!!」
ボイルの断末魔の叫びに被さるようにミセルの高笑いが響いた。
「さっきあんたが私の攻撃を避けたとき！地面に小型のミサイルを仕込んでおいたのよォォォォォォッ!!これこそヌクリア様の技術力の賜物よねェェェェ……えっ……？」
一瞬、ミセルの顔に正気が戻った。
（私、今〝ヌクリア様〟って……なんで……!?）
ミセルの心に迷いが生まれていることなど知らないボイルは激昂していた。
「この……俺がっ……この俺がああああああっ！」
「!!?」
その時、ミセルは見た。
ボイルの体から、目に見える黄金のオーラが漏れ出始めている所を。
その瞬間、恐怖が疑問を塗りつぶし、ミセルは再び殺人マシーンに戻ってしまった。

「いい加減……くたばりなさいァァァァァァァァァ!!」
腕が振り下ろされ、のめり込む。
胸骨を粉砕され、心臓が潰される。
「ごっ」
ボイルは、息絶えた。
体を纏いつつあったオーラも、みるみるうちに消えていく。
「勝った……ッ!」
しかし安堵も束の間、ボイルの遺体から凄まじい突風が発生した。
「!?」
部屋の中の機材はもちろん、壁や床まで抉り取っていく。
「きゃああ!?
……」
「……そんな!?」
「どうした?」
下の階で待機していた小隊に悲報が届いた。
「た……隊長の生体反応が……消えました、完全に……」
「なんだって!?」
その場の全員が示し合わせたかのように驚いた。
リバース獣の最上位種さえも倒したあのボイルが死んだ。

その知らせは、戦造人間達の士気を打ち砕くには十分過ぎた。
「一体どんな化け物が相手だっていうんだよ……」
メンバーの大半が完全に意気消沈する中、とあるメッセージを入力している男が一人いた。
シナプスだ。
（すまんコーディン、俺はもうダメかもしれない……！）
シナプスは死を覚悟していた。
いくら将来有望とはいえ、訓練生では戦闘力はお察しだ。
ならばせめて、ある重大な事を伝えておきたい。
（これが、遺言ってヤツなのか……）
次の瞬間、塔が振動した。
「なんだ……!?」
上を見た瞬間、その意味はわかった。
床が崩れ落ちてきていたのだ。
その瓦礫は、当然戦闘員達に降り注ぐ。
「うわあああああああ……」
それだけではない。
瓦礫に続き、暴風が吹き荒れ、壁を抉り、潰された戦造人間達をフードプロセッサーの如くかき回した。
――――こうして、バースコーポレーション本社５番塔の頂上部は崩壊。
戦闘員達は……ほぼ全滅した。

「くそっ……！」
「落ち着くんだコ―ディン！過ぎたことだ、もうどうにもならん！」
治療室から出ようとするコ―ディンをノギが制した。
「違うんですよノギさん！俺が心配しているのは今後のことです！戦闘員がいなっくなったら、残っているリバース獣をどう駆除するんですか!!」
「大丈夫だ、最近生まれたばかりの新世代がいる！」
「じゃあそいつらが成長するまで待てというんですか!?そんなことはできない！」
「そうだな……」
正論を突き付けられ、ノギは黙ってしまった。
「……俺が戦うしかないのか」
コ―ディンは冷静さを取り戻していた。
「そうだ……今や君が希望なのだから……？何をしているんだ？」
コ―ディンがベッドの下に手を突っ込んでいる。
「すみません、ちょっと……おかしい……またコアが消えた……さっき新品をもらったばかりなのに……？」
探し物をしているようだが、コ―ディンが貴重品を簡単に紛失するとは思えない。
不審に思ってベッドの〝隙間〟を覗いてみると……
「これは……!?コ―ディン！ベッドの下を見ろ！」
「一体どうしたんで……!?」
二人は目を疑った。
そこに広がっていたのは、〝亜空間〟だった。
言葉には形容し難いが、その異様さは一目でわかった。
「これはッ……!?」
コ―ディンが手を引っ込めると同時に、空間は元に戻った。
「あっ……あったね、ヴァイタルコア。」
「ああ……はい」

ノギの言う通り、そこにはヴァイタルコアがあった。
ノギからコアを手渡されながらもコーディンは驚きが消えない様子だ。
「まさか……これは俺の、〝能力〟だというのか……？ボイルのような……？」
「隙間に亜空間を生み出す能力か……」
隙間に手を入れることで亜空間を生み出す。
お世辞にも戦闘向きとは言い難い。
「だが、能力が発現したのだから、高い戦闘力を持っているということは間違いない……コーディン！」
ノギは何か思いつめた顔でコーディンを見た。
「……しばらくの間、最前線で戦ってくれないか？」
ノギは〝覚悟〟を要求しているのだ。
不況の中意思を黒く保ち続けることに対する覚悟を。
「……もちろん」

それから１６年が経過した。
とある山奥の川沿いに悲鳴が響いた。
空から巨大な鳥のリバース獣が降りてきたのだ。
キャンプ中の一団は全員一目散に逃げ出したが、一人の子供が石に躓き転んだ。
「ＫＹＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!」
鳥は逃げた大人達を追いかけようと走り出した。

道に転がっている子供の頭上に、巨大な足が振り下ろされ……

「ズブゲッ」

しかし、子供は無事だった。

足が地面に触れるよりも早く、鳥は何者かに蹴りを入れられ、吹き飛ばされていたからだ。

弾丸のように突っ込んできた〝それ〟は、人の形をしていた。

〝それ〟は壁にめり込む鳥を尻目に、子供に声をかけた。

「今のうちに、早く逃げろ」

彼の名はコーディン。年齢３４歳。

バースコーポレーション戦力部隊隊長であると同時に、この物語の主人公。

第一章
第５話　～新世代の予兆～

バースコーポレーション戦力部隊が壊滅してから１６年が経過した。
ボイルがいなくなったことにより、生き残っていたリバース獣は各地に散らばり、再び繁殖し始めていた。
新隊長に就任したコ―ディンは自ら戦力部隊の最前線に立ち、殲滅活動に勤しんでいた。
そして現在、彼は巨鳥ブラーフの討伐にあたっていた。
「ＫＵＷＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮＮ！」
一直線に向かってくるブラーフ。
その体はまるで鉄の塊のように巨大だ。
しかし、コ―ディンは動かなかった。
それどころか彼は手で自分の衣服を掴み、引っ張り始めた。
そして、あろうことか繊維を引きちぎり、その隙間に手を突っ込んだのだ。
一見するとまるで意味のない行動だ。
傍から見れば、戦意喪失したのかと思われるかもしれない。
しかし、それは無知による大きな間違いだ。
「!?」
次の瞬間、ブラーフの眉間の肉が抉り取られていた。
しかも攻撃対象であるコ―ディンの姿が消えている。
急にブレーキをかけきれずに、岩壁に傷口をぶつける。
「ＧＷＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮ!?」
あまりの激痛で、コ―ディンが既に背後に回り込んでいることに気が付いていないようだ。
そしてその手には、先程までは無かったはずの金属が握られている。
サーベルのような持ち手がついているが、その先端は丸く、剣とい

うよりもむしろ鈍器に近いものだった。
「民間人の避難は済ませた。後は任せる」
コーディンは胸部から取り外したヴァイタルコアを手に持ち、それに向かって話しかけた。
それを合図に、物陰からおよそ１０人もの戦闘員が姿を現し、ブラーフに向けて集中射撃を始めた。
「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＷ……」
既にダメージを追っていたブラーフがそれを避けられるはずもなく、頭部を蜂の巣のようにされて息絶えた。
「これでまた一匹減ったな……」

本部に戻ってきたコーディンは、今回の事件を報告書にまとめて上層部に提出した。
「全く……１６年も経っているというのにまだこれだけ倒せていないのかね。リバース獣は全部でまだまだ沢山いるというのに！」
上層部の人間との面会だ。たとえどんなに強くても、戦力部隊隊長の権限は経営部上層部には及ばない。
「申し訳ありません」
コーディンの殊勝な態度に、上司の怒りは薄れたようだ。
「……まぁ、あの惨劇から生き残った有力者は君ぐらいだから仕方ないかな。だが、明日からは新人達の研修期間が終了して本格的に戦いに加わることになる。だから今後はもっとペースアップしたまえ」
そう、それなんだ。
コーディンは内心そう思った。
リバース獣にも階級というものがあるらしく、下位種と上位種（それと最上位種であるリクイダス）がいる。

詳しいことはわかっていないが、下位種の数が多いところにはなぜか上位種は現れないという習性がある。
だから新人達が戦力部隊に加わるときまで、下位種の数を減らし過ぎないように討伐ペースを調整していたのだ。
そして明日がその時だ。
「……ノギさん、今からそちらに向かうので例のリストを準備しておいてください」
コーディンはヴァイタルコアでノギにメッセージを送った。

「いよっしゃーーーーーーーーーーー!!」
訓練生の部屋が並んだ廊下に威勢のいい叫び声が響き渡った。
「うおぉい……相変わらずうるせぇなお前は」
声の主の隣にいる足の長い男、〝カスケード〟が呆れ顔でぼやいた。
「なんでだよ!!お前だって聞いただろ?明日から選抜メンバーの選別が始まるって噂!俺達が選ばれるかもしれないんだぞ!!?」
声を張り上げ続けている青年の名は〝ファラデー〟。
見ての通り、血気盛んな若者だ。
「まだそんなこと言ってんのか?選抜なんてする意味ないだろぉ。わざわざ数絞ってどうするんだよ」
カスケードは冷静そのものだった。
今更じたばたするぐらいならこれまで通り任務を遂行すればいいだけ。
それが彼の考えだからである。
「こらそこの二人!廊下を歩く時ぐらい静かにしなさい!!」
怒った顔をした女性が歩み寄ってきた。
「まぁまぁそうカリカリしないでテルミット!!」
「お前ときたら、叱られてるのにその態度……ってちょっと待ってな

んで俺も!?」
カスケードが渾身のノリツッコみをかました。
たまたま近くでその様子を見ていた一人の男がその様子を後目に立ち去った。
(選抜?お前らのようなカスどもは選ばれんよ……新世代のエリートはこのゾルなんだからな)
三人から離れた場所で、男はほくそ笑んだ。

「ロクショウお前、聞いたか?上位種討伐に向けた選抜メンバーが選ばれるっていう噂!」
食堂の片隅で訓練生達が雑談をしている。
「そんな噂があるのか……?まぁ俺には関係ないな、非戦闘員だから」
〝ロクショウ〟と呼ばれた男がそうそっけなく答えた。
ファラデーと違ってあまりやる気が感じられないが、彼もまた訓練生であった。
「まーたそうやって。お前なら十分戦闘員としてやってけるって」
「嫌なんだよ、そういう面倒なの」
この時、ロクショウはまだ知らなかった。
自分の名前が選抜メンバー候補のリストに入っているということを。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

第6話　～発揮される力～

講堂に、先日訓練課程を修了したばかりの新人が集められていた。
「……私からは以上だ」
コーディンの号令によって、就任式は終了した。
この時をもって、彼らも正式な戦闘員となったのだ。
「早速だが、君たちにはこれからリバース獣討伐に向かってほしい。我々も同行する」
「おぉ……！」
ファラデーは興奮した。
これまで自分たちは対人戦などによるシュミレーションしかしたことがなかった。
これからようやく本物のリバース獣と戦えるのだ。
その実感が、ファラデーの心の底の使命感を滾らせていた。
「それでは、チーム分けを行う！」

コーディン、ファラデー、ゾル、ロクショウの四名は山奥の湿地帯に向かっていた。
「じゃあお前、ホントは非戦闘員になるはずだったのか！」
「いやまぁ、ギリギリ及第点だったんで」
ファラデーはロクショウの奇妙な経歴に興味深々なようだ。
戦造人間にとって、戦いはあくまで職務にすぎない。
しかし、このファラデーの思想は違った。
リバース獣を殲滅し、人々の平和を守る。
そんな所謂模範的なヒーロー像というものを信じ切っており、正義感に溢れていた。

それに対してロクショウは本来非戦闘員になるはずだった。
しかし戦闘力指数が戦闘員加入条件に達していたために急遽戦闘員に加えられることになったのだ。
戦うことはあまり好きではない。
面倒だから本当はやりたくないとさえ思っていた。
しかし、与えられた職務を遂行しようとする気高い前向きさも持ち合わせている。
それがロクショウという男だ。
「それにしても、他の班は１０人単位なのに俺達だけ４人だけとはな」
「最強の隊長（リーダー）コーディンさんが一緒なんだ、妥当な班分けだと思うぜ」
ファラデーとロクショウが話し合っている間、ゾルは終始不満げな顔をしていた。
（冗談じゃない……まさかこの俺がてめぇら二人と同レベルだとでも……？）
ゾルは自分がコーディンの次に強い、ナンバー2に相応しい男だと思っていた。
だからこそこんな二人と同じ扱いを受けることが許せない。
異常なまでにプライドが高いのだ。
「着いたぞ、降りろ」
ビークルから降りた四人は周囲を警戒した。
下位種とはいえリバース獣だ。
どこかに潜んでいる可能性もある上に、不意打ちを食らえば致命傷を負いかねない。
「この辺りの様子は？」
コーディンがビークル内に駐在する非戦闘員に問いかける。
「高感度センサーの反応によると、ここら一帯は大丈夫です。どうやら少し先で同じ場所をぐるぐる回っているようですね」
「そうか……お前たち、行くぞ」
「はっ！」
四名は注意深く奥地へと進んでいった。

「ＢＵＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ!!」
「……なるほど、あれか」
その先にいたのは、草木を蹴散らしながら走り回る巨大な猪、ファングロウだ。
その目は血走っており、完全に闘争本能に支配されているようだ。
「総員配置につけ!」
その号令を合図に四人は散らばってファングロウを取り囲んだ。
下位種は理性的な行動をしない。楽な相手だ。
「ＢＵＦＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＭ!!」
「……!?」
しかしその思い込みが罠だった。
今までただ円を描いて走っていたファングロウの軌道が変わり、ロクショウに突進し始めたのだ。
「しまった!ロクショウ!!」
ファラデーの悲痛な叫びも空しく、ファングロウはロクショウに突っ込んでいく。
「ふん、成り上がりらしいあっけない最後だな」
それを見ながらゾルはロクショウを嘲笑うかのような笑みを浮かべていた。

「〝富久〟」
「!!」
ロクショウはファングロウに平手を突き出した。
力が込められているようには見えないその手が、ファングロウの体に触れる。
次の瞬間、ファングロウの軌道が逸れた。
まるでサルスベリの木に登ろうとする子供のようにツルリと滑ったのだ。

（力を外側へと逃がしているのか……！）

柔よく剛を制すという言葉を体現するかのような拳法による戦闘スタイルにコーディンは思わず関心した。

「すげぇ！お前そんなこと出来るんだな!!」

「これが非戦闘員から抜擢された理由ってわけか」

ファラデーは大はしゃぎし、ゾルはつまらなそうに鼻を鳴らした。

勢いの向きを変えられて、ファングロウの巨体は地面にめり込んだ。

「……〝バルクアップ〟」

「KUUFUUUUUUUU……」

苦し気に起き上がろうとするファングロウ。

しかし、その足が伸びるよりも早く、ゾルの飛び蹴りが炸裂し、再び吹き飛ばされることになった。

バルクアップ。それはゾルが独自に編み出した体術で、全身の血流を急激に促進することによって過剰なパワーとスピードを発揮できるようになるというものだった。

「はぁっ……はぁっ……くたばったか……？」

だがファングロウは倒れなかった。

吹き飛ばされながらも大地に踏ん張り、やがてゾルに逆襲せんと走り出したのだ。

「……なんだとォ!?」

「KUBAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAARR!!」

ゾルは恥じた。死を恐怖するよりも先にだ。

バルクアップは自分を特別たらしめる技だという自負があった。

しかし弱点である燃費の悪さを見て見ぬふりして実践投入したのは大失敗だ。

そのことは、ゾルのプライドに傷を残すのに十分であった。

「……お前、何を!?」

顔を上げたゾルは目を疑った。

ファラデーが自分を庇うように立ちふさがっていたからだ。

「ゾルは俺の仲間だ!!こんなところで死なせるかよッ!!!!」
「あぁ!?脳ミソ溶けちまってんのかてめェはよォォォォ!!犠牲者が増えてるだけじゃあねぇかッ!!」
「くそッ……!」
コーディンは二人を助けるべく駆け出した。
「……ん!?」
しかし、何かに反応して突然立ち止まった。
「あいつ、まさか……!?」
「隊長(リーダー)!なぜ止まるんです!」
ファングロウの勢いは止まらない。
このまま放っておけばファラデーとゾルに激突するのは誰の目にも明らかだった。
「ンンンンンスパァァァァァキンッッッッッッッ!!!!」
その時、不思議なことが起こった。
ファラデーが突き出した拳から、突如電流が流れ出たのだ!
「BUWWWWWWWWWWWNNNNN!?」
理屈では説明のつかないその力に、ファングロウもたまらず怯んだ。
「驚いたな……だが今は奴の始末が先だ」
そう言うとコーディンは地面の割れ目に手を突っ込み、中から専用武器、〃フラクチュア〃を取り出した。
丸みを帯びた棍棒を片手に、敢然と立ち向かう。
それを目視したファングロウは自慢の巨大な牙を振りかざした。
「ずあっ!」
すかさずコーディンもフラクチュアを振るう。
ゴキャアという鈍い音がが響き渡った直後、ズンッと大地に震動が走った。
フラクチュアは無傷。
そしてファングロウの牙は……根元からへし折られていた。
地面にはさっきまで牙だったものが突き刺さっている。
「……!?BUHIYAAAAAAAAAAAAAAAA

ＡＡＡＡＡＡＡ!?」
口元から血液を滴らせながらファングロウは泣き叫ぶ。
すかさずコーディンはフラクチュアを槍投げ選手のようにファングロウめがけて投げつけた。
鈍器は頭蓋骨に直撃。
支柱である牙を既に折られていたためか、その骨は脆かった。
「ｑａｗｓｅｄｒｆｔｇｙｈｕｊｉｋｏｌｐ；@：」
震動で脳を壊されたらしく、ファングロウは断末魔のうめき声をあげながら息絶えたのだった。
「ふぅっ……さて、と……」
コーディンは新人三人に目をやった。
今回の件で確信した。
この三人には特別な力があるのだ。
特殊な拳法を扱うロクショウ。
急激にパワーアップしたゾル。
そしてファラデーは自分と同じ能力者ときた。
（まさか今期の新人にはこのレベルの実力者がまだいるのか……？）
「隊長（リーダー）、リバース獣の死亡確認ができました」
胸部のヴァイタルコア越しに、ビークルに残してきた非戦闘員の声がした。
「……そうか。」
先が思いやられる。コーディンは内心そう呟くのだった。

第7話　～その男、驕慢につき～

「全員揃ったので、本部に戻りましょう」
コーディン、ファラデー、ロクショウ、ゾル。
ファングロウの討伐を終えた一行は、ビークルの中に戻っていた。
しかし、発射しようとした直前、警告音が響き渡った。
「緊急信号か……！発信源は!?」
慌てた様子のコーディンが確認をとる。
「C部隊からです！」
その言葉にファラデーが食いついた。
「C部隊……!?カスケードとテルミットがいるところだ！」

「ぐわっ……！」
大きな蛇のリバース獣、カーマ。
その尻尾に吹き飛ばされ、カスケードは岩壁に叩きつけられた。
衝撃で破れたスーツはたちまち修復されるが、繊維に覆われていない顔は打撲の痣が赤く腫れあがっていた。
「うぁっ……くっ……こいつはかなり厳しいぞ」
その時、後方からビークルが飛んできて荒っぽく着陸。
中からファラデーが血相変えて駆け出してきた。
「大丈夫かカスケード！いったい何があったんだ！」
「ファラデー……俺はいい、それよりあいつの口元を見ろ！」

「……!?そんな……ッ!!」
ファラデーは衝撃のあまりその場に立ち尽くした。
カーマの口からはみ出ているものは……
「テルミットが……呑み込まれた!!」
女性の足だ。
C部隊に女性は1名しかいないはずだった。
既に上半身を呑まれたテルミットが懸命に足をばたつかせている。
「なんということだ……」
「そういうことか」
コーディンとロクショウもビークルの中から出てきた。
「立てるか、カスケード」
「はい、まだなんとか」
「ならビークル内で応急処置をしてもらえ。俺達はこれから腹部に衝撃を与えてテルミットを吐き出させる」
そう言うや否や、コーディンは自身の専用武器フラクチュアを槍投げの如く投げ飛ばした。
ロクショウは前方に出て落ちてくるテルミットを受け止める体制に入っている。
しかし、カスケードの表情は晴れなかった。
「無理です!無理なんです!!奴のあの表皮!脂肪ッ!俺達が奴を倒せなかった理由もそこにある!」
次の瞬間、フラクチュアはカランと音を立てて地面に転げ落ちていた。
いや、確実にカーマの腹部に命中していた。それは間違いない。
しかし、カーマのゴムクッションのように分厚く柔軟性のある脂肪に弾き飛ばされてしまったのだ。
「隊長のフラクチュアが通らない!?」
ロクショウは予想外の事態に動揺した。
カーマの尻尾が再びしなり、ロクショウに襲い掛かった。
「つぁっ!」
残像が見えるほどの超スピードで走ってきたコーディンが尻尾に

パンチで迎撃する。
その拳で一瞬静止した尻尾にロクショウも触れる、本部に戻りましょう」
コーディン、ファラデー、ロクショウ、ゾル。
ファングロウの討伐を終えた一行は、ビークルの中に戻っていた。
しかし、発射しようとした直前、警告音が響き渡った。
「緊急信号か……！発信源は!?」
慌てた様子のコーディンが確認をとる。
「C部隊からです！」
その言葉にファラデーが食いついた。
「C部隊……!?カスケードとテルミットがいるところだ！」

「ぐわっ……！」
大きな蛇のリバース獣、カーマ。
その尻尾に吹き飛ばされ、カスケードは岩壁に叩きつけられた。
衝撃で破れたスーツはたちまち修復されるが、繊維に覆われていない顔は打撲の痣が赤く腫れあがっていた。
「うぁっ……くっ……こいつはかなり厳しいぞ」
その時、後方からビークルが飛んできて荒っぽく着陸。
中からファラデーが血相変えて駆け出してきた。
「大丈夫かカスケード！いったい何があったんだ！」
「ファラデー……俺はいい、それよりあいつの口元を見ろ！」

「……!?そんな……ッ!!」
ファラデーは衝撃のあまりその場に立ち尽くした。
カーマの口からはみ出ているものは……
「テルミットが……呑み込まれた!!」
女性の足だ。
C部隊に女性は1名しかいないはずだった。
既に上半身を呑まれたテルミットが懸命に足をばたつかせている。
「なんということだ……」
「そういうことか」
コーディンとロクショウもビークルの中から出てきた。
「立てるか、カスケード」
「はい、まだなんとか」
「ならビークル内で応急処置をしてもらえ。俺達はこれから腹部に衝撃を与えてテルミットを吐き出させる」
そう言うや否や、コーディンは自身の専用武器フラクチュアを槍投げの如く投げ飛ばした。
ロクショウは前方に出て落ちてくるテルミットを受け止める体制に入っている。
しかし、カスケードの表情は晴れなかった。
「無理です!無理なんです!!奴のあの表皮!脂肪ッ!俺達が奴を倒せなかった理由もそこにある!」
次の瞬間、フラクチュアはカランと音を立てて地面に転げ落ちていた。
いや、確実にカーマの腹部に命中していた。それは間違いない。
しかし、カーマのゴムクッションのように分厚く柔軟性のある脂肪に弾き飛ばされてしまったのだ。
「隊長のフラクチュアが通らない!?」
ロクショウは予想外の事態に動揺した。
カーマの尻尾が再びしなり、ロクショウに襲い掛かった。
「つぁっ!」
残像が見えるほどの超スピードで走ってきたコーディンが尻尾に

パンチで迎撃する。
「くっ……！」
コーディンは弾力にはじかれて飛ばされていったが、その打撃で一瞬遅くなった尻尾にロクショウも触れる。
「”平林”！」
攻撃の軌道を逸らせ、地面に叩きつけようという魂胆だ。
「うおっ!?」
しかし、叩きつけられたのはロクショウの方だった。
「うあああああああッ!!こ、こいつの表皮……”滑る”！俺の拳法が、全く通らないっ！」
後方に吹き飛ばされたコーディンは、地面に着地し、前方を見た。
（直接触れてわかった……奴の脂肪には直接的な打撃はほとんど通らない！）
コーディンの専用武器フラクチュアは、彼の能力に合わせて開発されたものだ。
コーディンの能力。
それは”隙間に亜空間を作り出す”というもの。
かなり使い勝手の悪い能力だが、実戦経験を積む内にコーディンはある法則を見つけた。
それは『手で直接でなく、自分が持っている棒などを触れさせても亜空間は発生する』というものだ。
フラクチュアはその性質を利用した武器だ。
触れた相手に微細な震動を与えることで細胞の隙間を作り、そこに亜空間を作ることによって崩壊させる。
この武器により、リバース獣との戦いにおいてコーディンは最強になった。
しかし、今相対するカーマにはそれも通じない。
奴の脂肪はゴムまりのように柔らかく、隙間が生じる余地もない。
即ち、コーディンにとって相性最悪の敵というわけだ。
最強イコール無敵というわけではない。
「しかし……このままではテルミットとロクショウが！」

ロクショウはすり潰される胡麻のように地面にこすりつけられている。
テルミットの足ももうつま先しか見えなくなっている。
万事休すかと思われたその時。
「はぁ～……ダセェんだよォォォォォお前らのやり方！隊長が下位種相手に手こずって、恥ずかしくないの？」
「何？」
声がする方を振り返ると、そこには三白眼の戦闘員がいた。
「お前、確かヤコブとかいう新人か……お前こそただ見ているだけじゃあないのか？」
「ぐおおおおおおおおおおおっ!!」
カーマに投げられたロクショウがヤコブ達の前に飛ばされてきた。
ヤコブはしゃがみ込み、ロクショウの腕を掴んだ。
「すまん……俺はもうダメだ……」
「いーや、まだまだ体張ってもらうぜ」
そう言うと、ヤコブは突然ロクショウの体を空中に投げ飛ばした！
「な……なにをッ!?」
「戦えない戦造人間など、必要ない！」
「ロクショウ!?ヤコブ貴様ーッ！何のつもりだ!!」
「慌てんなよ。戦いの役に立ってもらうだから……まあ見てな」
無防備なまま宙を舞うロクショウ。
それに反応したカーマは、ロクショウに食らいつこうと口を突き出した。
「!!」
しかし、突如カーマは動きを止め、苦しそうに唸り始めた。
目の前の獲物に夢中になるあまり、テルミットをのどに詰まらせてしまったらしい。
「よぉし……これで討伐できる」
満足げな表情を浮かべるヤコブを見て、コーディンは複雑な心境だった。
今の行動によってカーマ打倒に近づいたのは確かだ。

しかし、そのために平気で仲間を犠牲にするそのスタンスに、前隊長ボイルの面影を感じずにはいられなかった。
「隊長！」
背後から聞こえたカスケードの声で、コーディンは現実に引き戻された。
カスケードと一緒にファラデーも走ってきた。
「今、テルミットから連絡が入ったんです！」
「……！」
どうやらテルミットはカーマの喉元にうまいこと留まっているらしい。
つまり、テルミットはまだ再起不能ではないということだ。
「とどめは俺達にやらせてください！」
「何か策があるようだな。いいだろう」
カスケードは戦造人間専用銃『イレイザー』を腰のホルスターから取り出した。
イレイザーは、戦造人間の生命エネルギーを弾丸に変換して発射する装置だ。
大抵の戦造人間からは直接殴った方が強いという理由からあまり使われていないのだが、カスケードはこのイレイザーを愛用していた。
「俺の〝弾〟は、壁をすり抜ける」
そう呟くと、カーマに向けて弾丸を数発発射した。
弾はカスケードの宣言通り、カーマの首の肉をすり抜け、体内へと入っていった。
「～～～～～～～!?」
途端にカーマが身をよじらせ、口からテルミットを吐き出した。
「おっと」
降ってきたテルミットの体を受け止めるカスケード。
「おい！今のは一体なんだ！何をやったんだよ！」
何が何だかわからないという様子でファラデーが尋ねた。
「俺の弾は壁をすり抜けるってことはさっき言ったな？その弾をテル

ミットが蹴り飛ばして体内の内臓に拡散したって寸法よ」
「ふぅぅぅ～……正直言ってかなり命の危険を感じたわ……かろうじて喉頭にしがみつけたけどね」
カーマが地面に倒れこんで痙攣し始めた。
「さっ、最後の一撃頼むぜファラデー」
「お、おう！」
カーマの口が開いた瞬間。
「ンンンンンスパァァァァァァキンッッッッッッッ!!!!」
ファラデーの拳から電流がほとばしり、カーマの口から全身に入り込んだ。
「ＨＧＯＮＮＮＮＮＮＮＮ！」
声にならない悲鳴と共にカーマは息絶えたのだった。
喜ぶファラデー達を他所に、コーディンの表情は重いままだ。
（下位種の中でもかなり強い方だった……そろそろ下位種の数を抑えるのも限界か……？）

「うぅぅ……」
ヤコブに投げ飛ばされたロクショウは遠い地面に落下していた。
「あの野郎……うっ……ひとまず戻らなくては……ハッ!?」
地べたを這うロクショウの目の前にいたのは、ゾルだった。
「ゾル……？お前、ビークル内で待機していたはずじゃ……」
「おいおい、酷い反応だな……俺はお前を迎えに来たんだぞ？」
ロクショウはゾルの本当の目的を薄々察していた。

ゾルは仲間を迎えに来るような男ではない。
「その前に、もう少し怪我してもらう。再起不能になるぐらいにな!!」
ゾルは足を上げ、既に満身創痍なロクショウの背中を凄まじい力で踏みつけた。
「ぬあぁぁあああああああああああああああああああああああああああッッッ!?」
あまりの激痛にロクショウは失神してしまった。
「ふん、元非戦闘員の成り上がりがしゃしゃり出やがって……これでしばらくは病棟から出られまい」
そう呟くと、ゾルはロクショウの体を引きずりながらビークルへ戻っていった。

第８話　～ネクスト・ステージ～

「あまり戦績が芳しくないね」
　コーディンは上層部からの叱責を受けていた。
「申し訳ありません」
「専用武器まで持っておきながら下位種に傷一つ付けられないとは、戦造人間最強が聞いて呆れるよ……ボイルが生きていた頃の方がまだましだったんじゃあないかね？」
「ッ……！」
「今後は気を付けるんだね、君の部下にだって有望株が結構いるんだから」
「……はい」
　コーディンは戦力部隊の隊長ではあるが、それでも経営上層部の人間には頭が上がらない。
　いくら戦闘力が高くとも超えられない権力の壁があるというのが戦造人間の辛いところだ。

「じゃっ、二人の無事を祝って乾杯！」
「うん、ありがと」
「お前は無駄に元気だな……」
　食堂でファラデーがカスケードやテルミットと共に食事を共にしていた。
　三人ともカーマとの戦いから帰還したばかりだ。
「奮発して多めに買ったんだけど、食うか？」
　ファラデーが蛇の天ぷらを一つテルミットに差し出した。

もちろんリバース獣ではないごく普通の蛇の肉だ。
「いや蛇はちょっと……さっき食べられかけたばっかりだし」
「お前、デリカシーってもんはねーのかよエエ？」
カスケードがファラデーを睨む。
「別にいいじゃんか終わったんだから。食うってことは勝利したってことなんだぞぉ？」
そう嘯くと、ファラデーは何食わぬ顔で蛇の天ぷらにかじりついた。
「ところでさカスケード、お前の貫通弾も俺の電気みたいな能力なのか？」
「ちげーよ、俺のは地道な訓練で編み出した純然たる技だ！」
「じゃあ俺にもできるかもしれないのか？」
「オイオイオイオイ止めろって……俺のアイデンティテがィ薄れるだろうが」
「そうそう！そんな簡単に出来ることじゃないんだからねっ！」
三人はいつもの調子で語り合うのだった。

「うぅ……ひどい目にあったぜ」
病棟では、ロクショウが非戦闘員に看護されていた。
元々ロクショウも非戦闘員だった。

彼ら彼女らとは元同僚同士ということになる。
「大丈夫？」
「大体なんで戦闘員になんてなったわけ？適性検査の時も嫌がってたじゃない」
「いやさ、なんだかんだ言って戦闘員の方が給与いいわけよ。それに俺には相手の攻撃を受け流す特殊な拳法があるから何とかなるかなって」
最上位種のリクイダスは既に前隊長ボイルに倒され、現在の隊長は最強と名高いコーディン。
リバース獣との不毛な戦いも自分たちの代で終わる。
ロクショウはそう睨んでいた。
そして戦いが終わった後の老後を見据えて行動していたというわけだ。
「でも考えが甘かったってわけね」
「戦造人間が皆好戦的なわけじゃないんだぞ？出来る限り楽な暮らしがしたいだけなんだよ俺は。『余計な苦労は買ってでも避けろ』、それが俺の人生哲学だったのにあの野郎のせいで俺は……」
「ヤコブって野郎か？」
ヤコブの事は非戦闘員の間で話題になっていた。
非戦闘員の情報ネットワークには目を見張るものがある。
多くの戦闘員を日々見守り、些細な変化を感じ取るエキスパートなのだから。
戦力部隊の調和をかき乱す荒くれ者は格好のスキャンダルだった。
「いや、違う。あっいや違わない。違わないけど違うヤコブに投げられたのは本当だけど直接攻撃してきたのは」
「何？じゃあ一体誰がこんなことを」
「……言ったら今度こそ殺されるから言わねー」
この時、ロクショウはまだ知らなかった。
残酷な運命が近づいてきているということに。

「ロクショウをやったのはお前か？」
人気を避けた廊下に、ただならぬ雰囲気の二人の男が立っていた。
ヤコブとゾルだ。
「なんだその言い草は？最初に奴を放り投げたのはお前じゃあないか。責任転嫁はよせ」
「そんなんじゃねえよ。戦闘員はリバース獣を駆逐するための存在。多少怪我したって全部自己責任ってもんさ」
「じゃあ何故こんなところに俺を呼び出した？」
「感じたんだよ、俺と同じ匂いをあんたから……何ならあんたの計画に一枚かんでもいいぜ？」
「……ほう？」
ゾルに促され、ヤコブは戦造人間の存在意義に抵触する言葉を言い放った。
「この組織は腐っている。だから……」
その時、ヤコブの台詞を遮るかのように緊急サイレンが鳴り響いた。
戦造人間への招集命令だ。
「チィッ……続きはまた次の機会にしよう」
「そうだな」
二人は別々に散らばり、待機位置に向かっていった。

「クソっ、蛇の次はトカゲかよ！しかもこんなに沢山!!」
コーディン、ファラデー、カスケード、テルミットの４名の前には、トカゲのリバース獣が複数匹群がっていた。
しかし、今までのリバース獣とは異なり普通のトカゲと変わらないサイズだ。
「痛てぇっ！」
見るとファラデーの足に数匹のトカゲが噛みついていた。
戦造人間共通装備の特殊繊維を貫いて皮膚に達するのだからかなり鋭利な歯であることは間違いない。
「ええいっ消え失せろ!!ちゃあああああああああああああ!!」
ぐっと気合を込めると足から電流が迸り、トカゲ達を焼き尽くした。
「やるぞテルミット！」
「うん！」
カスケードが宙に向かってエネルギー弾を放ち、空中に飛び上がったテルミットがそれにオーバーヘッドキックを食らわせた。
すると一つだった弾が複数個に分裂し、大量に群がるトカゲ達を一度に焼き払った。
「フンッ！」
コーディンがフラクチュアを一振りすると、そこから生じた風圧だけでトカゲ達の体は消し飛ばされる。
（こいつら、下位種にしては小さすぎる……まさか!?）
一通り片付いたタイミングで突如ビークルから通信が入った。
「どうした？」
「たっ、助けて……うわぁぁぁぁぁ!?」

激しい衝撃音と共に通信が途絶えた。

「!!」

その場にいた全員に緊張が走る。

「馬鹿なッ!?リバース獣っていったら大抵は暴れることしか考えてないようなやつなんじゃないのか?それなのに、俺達ではなくビークルを直接狙いやがっただと!?」

カスケードの言う通り、下位種がビークルが直接狙うなどということは普通なら考えられないことだった。

「……!?ファラデー!後ろから何か来るっ!!」

テルミットに指摘され、ファラデーが振り返ったその先にいたのは、大きな（と言ってもこれまでのリバース獣に比べれば小さい。精々乗用車ぐらいか）トカゲが迫ってきていた。

「うぉいつの間に!?」

「HAAAAAAAAAAA……」

そのリバース獣を見て、コーディンは違和感を感じた。

あまりにも落ち着き払っている。

「まさか……」

「食らえスパァァァァアキンッッッッッッ!!」

ファラデーはいつものように拳から電流を放った。

しかし、その攻撃は当たらなかった。

大トカゲは飛び上がり、交わしてみせたのだ。

「何っ!?」

一瞬でけりをつけるつもりが、逆に間合いを詰められてしまったファラデー。

「うっ、があああああああああああああああああ!!」

次の瞬間、ファラデーは突然苦痛に叫び、地面に倒れ伏した。

「そんな……っ!?」

カスケードとテルミットは目を疑った。

大トカゲは、自らの尻尾の針をファラデーの足に突き刺していたのだ。

「やはり異常だ……精密すぎる！足だけを的確に破壊するとは、やはりこいつは……!!」
「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！なめんじゃあねえええ！」
　頭に血が上ったファラデーは再び電気攻撃の構えに入った。
「よせッファラデー!!」
「だぁぁぁ

第9話　～生存抗争～

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「止むを得ん……おい！」
　炎に包まれのたうち回るファラデーにコーディンが全身を覆い被せた。
「ううっ……くっ……」
　最初のうちこそ炎の熱に苦しむも、やがて炎は完全に鎮火した。
　コーディンの能力は隙間に亜空間を生み出すこと。
　密着することで隙間を二人の間に隙間が出来、そこに炎を吸い込んだのだ。
「うぅ……」
　しかし、もうファラデーは戦える状態では無かった。
「なんて野郎だ……強い！」
「私ハ引火性ノアル体液ヲ出セルノダ」
　大トカゲが人間の言葉で説明してみせた。
「……やはりお前は上位種のスタクレアだな」
「ソレハオ前達ガ勝手付ケタ種族名ダ……私ニハ〝アム〟トイウ名前ガアル。〝イーヴァ〟トイウ仲間モイル」
「ボイルの代に皆殺しにされたとノギさんから聞いていたが、生き残りがいたというわけか……」
　コーディンが独白する。
「ボイル……奴ノ空気ヲ操ル能力ハ非常ニ厄介ナモノダッタ……ダガ奴ハモウ死ンダノダロウ？ソウイウコトナラ私達ノ方ガ有利トイウモノダ」
「ッ……！」
「治療ガ必要ダロウ？ソイツヲ連レテ帰ッテモイイゾ。ソノ代ワリ、明日モココニ来イ。二人デナ」
「何……？どういうつもりだ」
「我々ノ間デ〝決闘〟ヲスル！〝生存抗争〟ダッッッ!!」
「決闘!?」

一同は戦慄した。リバース獣が決闘を申し込んでくるなど前代未聞だ。
「必ズ来イ！時刻ハ１６時ピッタリ！来ナケレバ民間人ノ街ニ侵攻スル!!」
「決闘ぅ～？ふざけたことぬかすんじゃあねぇぞ！今ここでお前を仕留める方が早いに決まってんだろうがこのダボが！」
「カスケード!!」
「……っ！」
コーディンに制され、カスケードは黙った。
「もし今ここでこいつを倒せたとしても、もう一匹が動く！そうなれば大勢の民間人の命が奪われることになるんだぞ！」
「そんな……！」
「だからこそ、乗らねばならない！奴の言う〝決闘〟に!!」
「くっ……」
ファラデーを運び込み終わると同時にビークルは本部へと急発進した。
「オ前達ハ必ズ我々ガ仕留メル……！今度ハ我々ガオ前達ヲ狩ル番ダ!!」

「上位種か……決闘を強要するとは舐めた真似を」
「電気の能力のファラデーがあっさりやられた……俺の言う通りになったろう？」
本部の人目のつかない廊下で、コーディン達とは違うエリアに発生した小トカゲの殲滅を終えたゾルとヤコブが立ち話をしていた。
「能力者が二人いるにも関わらずたった一匹相手に手も足も出ない、これが戦力部隊の現状さ。要するに今の戦闘員派遣制度はダメダメってわけさ。こいつはトップから叩き直さんとなァ」
「ふん、随分と大口を叩くじゃあないか。鼻つまみ者に過ぎないお前にそんなことが出来るとは思えんが？」
「出来るさ。何しろ俺は〝コレ〟だからな……」

ゾルの挑発を受け、ヤコブは自分のヴァイタルコアを外し、自らの胴体を露出させた。
「……何だと!?お前まさか……」
〝ソレ〟を見て思わず驚愕したゾルを見て、ヤコブは不敵な笑みを浮かべるのだった。

時同じくして、戦力部隊隊長コーディンと顧問ノギもまた対談をしていた。
「例の武器、完成はしたのだが……」
「そうですか……」
トランクケースの中に入っていたのは戦造人間専用武器、〝イレイザー〟のような物だった。
しかし、状来の物とは違い、側面に黄金のラインが施されている。
「しばらくの間ファラデーは再起不能……代わりに俺が持っておきます」
「馬鹿なことを言うんじゃあない！これは〝彼だけしか使わない〟ことを考慮して作られているということを忘れたか!!」
「わかってますって……使わずに勝利できるよう努めますよ」
そう言うと、コーディンは銃を手に取り、机の中の亜空間にしまった。
「それと、トランスを呼んできてもらえますか？」
「トランス……少し問題がある彼女を……？まさか」
「ええ……彼女を明日の決闘に出場させます」

戦闘員用の個室の一つの隅で、一人の女性がしゃがみ込んでいた。

彼女こそがトランス。彼女の隠された能力はコーディインのみが知っている。

病棟のベッドで、一人の男が呟いた。
「このままじゃ終われねぇ……もっと強くなりたい！」
彼の心に流れる電流は、まだ止まってはいなかった。

翌日１６時。
先日と同じ場所で、二匹の大トカゲ、〝スタクレア〟が待機していた。
「……来タナ」
スタクレアの内一匹の目線の先には着地したビークルから降りてくる男女二人組の姿があった。
コーディインとトランスだ。
「２対２の決闘。約束通り受けてやろう」
「ベリーウェル!!サァ、始メヨウカ!!〝生存抗争〟ヲッ！」
戦造人間とスタクレアの戦いの幕が今開けられた。

第１０話　～アクトレスと諸刃の拳銃～

「約束通り、二人で来たぞ！」
「約束ヲ守ッタ事ニハ礼ヲ言オウ」
「ダガ悲シイカナ、結局人類ガ滅ビルトイウ結末ハ変ワラナイガネ」
アムと一緒にいるもう一匹のスタクレアが荒々しい口調で挑発した。
「自己紹介ガ遅レタナ。俺ノ名ハイーヴァ」
「成程、そちらも二人いるというわけだな」
「戦えるか、トランス」
「えっ……はっ、はい……！」
トランスと呼ばれた女性は、弱々しく返事をした。

本部に残された戦造人間達の間にも緊張が走っていた。
「あのトランスという女は何者なんだ？いったい何故奴が代表に選ばれたというんだ」
「隊長さんには何か考えがあるんだろうよ」
ゾルとヤコブの会話を尻に、ノギは窓の外に目をやった。
（頼んだぞ……コーディン。そしてトランス……）

「シャアッッ！」
アムの尻尾が地面を鳴らすと同時に、イーヴァがコーディン目掛けて飛び出した。
「来るか……」
コーディンは身を引いてそれをかわし、地割れに手を突っ込んで中

からフラクチュアを取り出すと同時に空中へ飛び上がる。
「ずあああああああああああああああああっ！」
「ウウッ！」
がら空きになったイーヴァの背中に落下の勢いと共に打撃を加える。
更に着地してすぐ足払いで前足を崩し、顔面にフラクチュアを叩きこむ。
吹き飛んだイーヴァに追い打ちをかけようとするコーディン。
しかし、アムが横から現れ、コーディンの行く手を塞いだ。
「私ガイルコトヲ忘レルナヨ」
アムの後ろ足による強烈な蹴りを、コーディンはただ受け止めることしか出来なかった。
「ならばこれはどうだ！」
コーディンはありったけの力を込めてフラクチュアを振り下ろした。
しかし、その一太刀はアムの尻尾によって掴まれ、ピクリとも動かなくなってしまった。
「何……ッ!?」
「白羽取リィ……！オ前ノ動キノパターンハ既ニ見切ッタ……フラクチュアハ最早通用センゾ!!」
（成長のスピードが想像以上に速い……！）こうなれば、こいつを使うしかない……！」
「ホラホラドウシタァ？オ前ソレデモ戦造人間カヨ！」
「ううぅっ……！」
いつの間にかイーヴァの尻尾がトランスの首に巻きついていた。
今にも首の骨が折れてしまいそうだ。
「トランス……ぐおおっ！」
「自分ノ心配ヲスルベキダロウ？」
コーディンは岩壁に叩きつけられた。
両手でフラクチュアを抑えてはいるが、押し負けないよう堪えているだけで精一杯だ。

「……トランスッ！あの技を使えッッッッッッ！」
「隊……長……！」
「今、人類の未来は俺達二人にかかっているんだ！だがこのままでは全滅しちまうぞッ!!」
「私には……もう何も……」
「いいや違うねッ！お前は既に持っている！この状況を打破する確固たる希望の種を!!」
「イーヤ駄目ダネ！オ前ハ直ニ息絶エルノダカラナァ！血反吐ブチマケナァ！」
イーヴァは無慈悲にも力を強める。
しかし次の瞬間、予想外なことが起こった。
「……おぉおおおおおおおっ！」
「グヌッ!?馬鹿ナ!?」
トランスが恐るべき力でイーヴァの尻尾を振りほどいたのだ。
「このまま死ぬくらいなら……私のこの技、使わせてもらうぜっ！」
「!?」
イーヴァは目を疑った。
目の前に立っている女性が、先ほどまで自分と戦っていた相手と同一人物には見えなかったのだ。
目は吊り上がり、自信ありげな笑みを浮かべている。
口調も心なしか男性に近いものとなっている。
そこには最初の弱気な印象は微塵も見受けられなかった。
「はぁっ！」
「グァッ!?」
一撃でイーヴァを吹き飛ばし、すぐさまアム目掛けて突撃した。
「コノ女、先程トハマルデ別人!?一体ドウイウワケダ!!」
「やかましいっ！」
アムの尻尾を掴み、砲丸投げのように勢いよく放り投げた。
「助かっ……」
「おおっと待てよ！しばらく黙っててくれ！今俺はコーディインになってるつもりなんだぜ？本物の存在を意識したくない！」

「……あぁ」
トランスが豹変した理由、それは強烈な〝自己暗示〟だ。
自分がコーディンになったと思い込むことによって、その動きと強さを疑似的に再現するという寸法だ。
「いや、ちょっと……ふぅぅ……もうこれ以上持ちません……」
コーディンをトランスは急に倒れ伏した。
自己暗示には膨大な精神エネルギーを消費する。
肉体に影響を与えるとなれば尚更だ。
「ありがとう、トランス」
トランスの体をゆっくり横たえると、コーディンは二匹のスタクレアを睨め付けた。
「ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＷＮ!!オノレェェェェェェェ！調子ニ乗ルンジャアナイゾ戦造人間ンンンンン!!」
「慌テルナイーヴァ、マダ我々ガ優勢デアルコトニ変ワリハナイ」
二匹はまだ余力を残していた。
二対一。圧倒的に不利な状況だ。
トランスのお陰で窮地を脱したは良いものの、このままでは再び追い詰められてしまうだろう。
（こいつを使うしかないか……）
二匹が突撃を開始した瞬間に、コーディンは左手で服を握りしわを作った。
アムのかぎ爪を右手のフラクチュアで受け止め、力を込めて左に押す。
そうすることによりイーヴァがアムの真後ろに来ることになる。
「フン、盾ニシタツモリカ？何モ考エズ衝突スルホド鈍クハナイワ!!」
そのまま行くと直撃するため、イーヴァはアムを避けて横に曲がろうとした。
しかし、もう遅い。
既にコーディンの狙い通りの展開になっていた。
「いや？別にそんなつもりじゃあないさ……俺の狙いはあくまでこの〝位置〟だ」

コーディンは、服のしわによって生じた〝隙間〟から左手を出す。
そこには黄金の装飾が施された〝拳銃〟が握られていた。
「!?シマッ……」
アムは慌てて逃れようとしたが、それよりもコーディンが引き金を引いた。
『Ｅｒｒｏｒ』
瞬間、銃口から凄まじいエネルギー波が放たれ、野を放射状に焼き払った。

「ぐっ、うおあぁあああああああ

第11話　～水と油と蟲の群れ～

「この前出てきた上位種に隊長が使ってた新武器って、あれはいったいどういう仕組みなの？」
基地のトレーニング室。
そこではカスケードとテルミットが世間話を繰り広げていた。
テルミットはレッグプレス、カスケードはラットプルダウンを行っている。
「いや、多分ありゃ俺たちが普段使ってるイレイザーの強化版だろうな。リミッターを外したって感じか」
カスケードの推察は当たっていた。
〝イレイザー〟。それは戦造人間が使う特殊な拳銃。
その実態は使用者の生命エネルギーを弾丸に変えて打ち出す装置だ。
その出力を高めたものが〝ツヴァイレイザー〟である。
しかし、ツヴァイレイザーは強すぎた。
開発時に想定されたある人物以外の者が使用すると、エラーを起こして膨大な破壊力と引き換えに精力を際限なく吸い取ってしまうのだ。

「隊長が復帰するまでの一週間、オレ達が前線に出ないとなぁ」
「!?」
声のした方を見ると、そこにはランニングマシンで走るファラデーの姿があった。
「えっ、ファラデー!?なんで!?入院してたはずじゃ！」
「緊急度測定が４下回ったからさ、こっそり病室抜け出してきたんだよ。三日間ずっと寝たきりだったから、体動かさないとな！」
緊急度測定とは、戦造人間の負傷度合いを測る数値である。
１から１０まであり、７を上回った戦闘員は絶対安静を課せられる。
この制度には、たとえ隊長であっても逆らうことは出来ない。

「とにかく、今日から復帰することにしたから」
「いやいやダメでしょ！まだ退院許可は出てないのに勝手に出てきちゃ!!」
「別にいーだろそれぐらい、もうどこも痛んでないぜ」
未来のエースは、あっけらかんとしているのだった。

４人の戦闘員に招集がかかった。
リバース獣が出現したのだ。
レーダーによると敵は各地に散らばっているようなので、二人づつで分かれることとなった。
ヤコブは、自分のペアになる男に声をかけた。
「よぉ、お前さん復帰してたのか」
コーディンと入れ違いで戦線復帰した男が一人いる。
ロクショウだ。
「……」
「……なんだよ、まさかまだ根に持ってるってわけじゃあねぇだろうな」
「当たり前だろ。俺はお前らに殺されかけたんだぞ？」
そう、ロクショウは一度ヤコブに放り投げられた。
もっともその後直接止めを刺したのはヤコブではなくゾルなのだが。
「大げさだなァ、あの場面ではああするのが一番手っ取り早かったんだ。俺の近くに都合よく転がってきたお前が悪いんだぜ？」
「お前ら、二人で結託して何を企んでいる？」
「何のことやら？そんなことよりこれから戦う敵に集中しろよ」
目標地点にいたのは、小さい虫だった。
普通の虫よりはいくらか大きいが、それでも精々電子レンジ程の大きさしかない。
「おいおい、なんだこいつはたまげたな……小さい虫けらじゃあねえ

か。これぐらいなら簡単に始末できるな」
その虫が体当たりをかましてきたが、ロクショウはそれを片手でありしらい地面に落下させた。
「拍子抜けにも程があるな！これじゃあ病み上がりのウォーミングアップにもなりゃしないようだ！」
地面に転がった虫は、体を小刻みに震わせている。
そしてしばらく震えた後に、先ほどよりも強い速度で突進を仕掛けてきた。
「むぅ！来るか……しかしッ！」
瞬間、ヤコブの腕が虫を叩き落としていた。
「最後の馬鹿力ってところだろうが、残念だったな。俺は機械のように精密な動きをする……相手が悪かったってわけ」
虫は地面にへばりついたまま動かなくなっていた。
「こっちは今終わった。死体を回収しに来てくれ」
その後、駆け付けた解析班員によって死亡確認がとられ、遺体はビークル内に運び込まれた。
別の地点で沢山の虫と戦った後のカスケードとテルミットと合流し、一同は基地に帰還することにした。
しばし機内に気まずい沈黙が流れる。
以前のカーマ戦でトラブルが起きた時と全く同じ面子だったからだ。
「お、ロクショウのとこのは赤色なんだな」
気まずさを破るためか、カスケードが話題を振った。
「ん？そういえば色が違うな」
カスケード達が狩った虫達の体表は緑色。
それに対してロクショウ達が狩った一匹の虫の色は赤で、心なしか他の個体よりもサイズが大きい気がした。
「群れのリーダーだったのか？はぐれたのが運の尽きだったがな」
しかし、ビークルが基地の近くまで進んだその時、ロクショウは異変に気が付いた。
死んでいたはずの虫達が特殊ケースを突き破って飛び出してきた

のだ！
「なっ……何イーーーッ!?おい！操縦席から離れろーーッ」
「えっ……うわあああああぁぁアアアッ!?」
ビークルを操縦していた非戦闘員に赤い虫が突進し、左腕を吹き飛ばした。
「痛でえぇぇぇぇ！馬鹿な！確かに死んでいたはずなのに……息を吹き返したというのかーーッ!?」
カスケードはイレイザーを構え、銃弾を乱射した。
しかし、一発も当たらない。
各々の虫達が素早い動きで弾を避けるのだ。
「スットロイゼェェェェ拳銃使イ！」
「喋った……こいつ上位種か!!」
大抵のリバース獣は破壊衝動に支配されているが、言葉を話すほどの知能を持つ者が一部いる。
それが上位種なのだ。
「俺達ノ名ハ、ヴァーミン!!オ前ラ乗リ物ニ乗ルトコロヲ待ッテタゼェ！」
「ああっ!?」
テルミットが悲鳴を上げた。
先ほど攻撃を受けた運転手の顔がどろどろに溶けていたのだ。
「ヴァァァァァァァァカ共メ！俺達ハワザトヤラレテタンダヨォ！体液ヲ分泌サセルタメニナァ!!」
そう言うと、ヴァーミンはウジュルウジュルと音を立てながら液体を垂れ流している自らの触手を見せびらかした。
「酸!?」
カスケードが間髪入れずに銃撃するが、全く当たらない。
「マダワカランノカ！当タラネエンダヨォ!!テメェモクタバレーッ！」
しかし、カスケードの左手には二つ目のイレイザーが握られていた。
テルミットから投げ渡された物だ。

「ナンダト……」
「もらった！」
エネルギー弾を発射。赤い個体に命中するかに思われたが……
「……ナァァァァァァァァァァァァッンッッッッッッッテ!!」
ヴァーミンは鎧のように硬い表皮で弾をはじき返してきた。
「ぶっ」
避ける間もなくカスケードの顔面に直撃。
倒れて床に頭を強打し、動かなくなってしまった。
「そんな……」
「俺ノ装甲ニ飛ビ道具ガ効クトデモ思ッタカ間抜ケガァ！ギャハハハハハハハハハハハハ」
「だったら、直接ぶっ叩くしかねぇな。おい、どっちでもいいからビークルを不時着させな……俺がこいつを始末する」
揺れる機体の中でも安定して歩ける脚を持ったテルミットが先に操縦席につき、ロクショウは本部へ報告を行った。
一同は基地付近の岩山に緊急不時着し、外に出た。
「大丈夫カスケード？しっかりして!!」
「くうぅ……」
カスケードの体を肩で支えながら運び出すテルミット。
「密閉空間カラ逃レタダケデ勝テルトデモ思ッテンノカァ？コノドグサレドモガァァァァ～ッ！」
「おーい！大丈夫かお前ら！」
「!?」
聞き覚えのありすぎるやかましい声が近づいてくる。
ファラデーだ。
「ちょっとあんた何してんの!?」
「何とはなんだ、助太刀しに来たんだよ！カスケード、怪我してんだろ？お前が付きっきりで守ってやれよ、俺に任せてさ」
「マタ一人無駄死ニシニ来タカ……」
「三人か……丁度いい、俺が本体を叩く。お前らはその他大勢をどうにかしろ」

「……勝手にしろ！」
言うが早いかロクショウが緑ヴァーミンの群れに突っ込んでいった。
ヤコブがその後に続き、ファラデーはその場にとどまる。
虫達は獲物のロクショウに突進していくが、独自の拳法によって勢いを殺され後ろに飛ばされる。
ロクショウがヤコブの道を開け、ファラデーがその後始末をするという寸法だ。
「他ノ奴ラヲ分散サセテ本体デアル俺ダケヲ狙オウトイウノカ！ダガ、俺ニ攻撃ヲ当テルコトハ絶対ニ出来ン!!」
赤ヴァーミンは素早い体当たりでヤコブの足をへし折った。
「ぐうっ!?」
正面から地面に倒れ伏すヤコブ。
「足ヲ封ジテヤッタゼ！コレデモウテメエハ無力!!終ワッターーーーーッッッッッ!!」
ヴァーミンは、ヤコブの顔に酸を浴びせようとした。
しかし、それは叶わなかった。
ヤコブの手がヴァーミンの背中を鷲掴みにしていたのだから。
「ゲッ」
「やはり安全地帯はこの背中のようだな……ご自慢の装甲を溶かすわけにはいかないからよぉ～」
「シ、シカシ馬鹿ナ!!人間ノ関節ガソンナ曲ガリ方ヲスルハズガ……ブベッ」
ヴァーミンは凄まじい勢いで地面に叩きつけられた。
確かにヤコブの肩関節の可動域は普通の戦造人間と比べて明らかに異常だった。
しかし、彼には特に苦しそうなそぶりは見えない。
「プライバシーにあんまり深入りするんじゃあねえ……まぁちょっとしたブラフってやつだ。行くぜダメ押しのラッシュ」
「グ……ググ～～ッ」
文字通り虫の息のヴァーミンのうめき声など微塵も気に留めず、そ

の腕が振り下ろされる。
何度も、何度も。往復して。
「ブラブラブラ

「あ、そういえば今まで名前なんて無かったよな……じゃあさ、能力に名前つけようぜ！」
「やっとる場合か、早く行け！」
「そうはいかない。名前がある方がちょっとカッコいいからさ……よし」
　ロクショウは内心呆れた。
　闘いの真っ最中だというのに油断しすぎだ。
「……名づけて、ライディーンＳＴＡＧＥ２!!今までのはライディーンＳＴＡＧＥ１ということにしてくれ！」
「ＧＳＹＡＡＡ

何やら不機嫌そうな顔をしている。
「早く帰るわよ、ファラデー。あんたのこと、隊長に伝えておくから」
「ええっそんな!?勘弁してくれよ!!」
敵を制して基地に帰還する４人。
しかし、ファラデー達３人は気が付いていなかった。
テルミットの口周りに怪しい灰が付着していたことを。

第１２話　アンレスト

「急に呼び出したりしてごめんねトランス。ちょっとこれからする質問に答えてほしいんだけど」
「？」
虫のリバース獣、ヴァーミンとの戦いから３０分も経たない内に、テルミットはトランスを基地の隅に呼び出していた。
トランスは不安を感じていた。
元々人付き合いが好きではない性格だが、それだけではない。
テルミットから、いつもとは違う異様な雰囲気を感じ取っていたのだ。
「この前トカゲのリバース獣と戦ってたの、あれって貴女よね？記録映像を見たけど今とはまるで別人みたいだわ」
「うん……ああやって別人みたいにならないと上手く戦えなくて……」
「いや別に……強そうだって思ってね……だから！」
「!?」
突如、トランスの腹部に激痛が走る。
至近距離からテルミットが蹴りを食らわせてきたのだ。
「どう……し……て……」
口から血を垂れ流し、トランスは倒れ伏した。
「……まずは一人」
そう言うと、テルミットは口角を歪ませた。
まるで凶悪なリバース獣のように。

「こんなところでこそこそと何やってんのヤコブちゃん？」
そこはヤコブの部屋のに秘かに設けられた地下室だった。
「テルミット？どうしてここに来やがった？」

「さぁ？機械のくせして戦造人間の一員ぶってる奴の顔が見たくなっただけよ」
「何だと!?そこまで知ってるとは、てめぇ……本当にテルミットか!?」
「気づくのが遅いんだよとんちき！そうとも私はテルミットじゃない。この前あんたにぶっ叩かれたリバース獣、ヴァーミンだよ！実力未知数で危険なトランスの次は真っ先にあんたをぶち殺してやると決めておったわ!!」
「他人の体を乗っ取っているからといってこの俺が手加減するとでも思っていたのか？まとめて消してやるッ!!」
　しかし、ヤコブの攻撃は外れた。
「何ィイイイ!?」
「潰される寸前にあんたの素性はわかった……あんたの体は機械で出来ている!!」
「!!」
　凄まじい力で腕を吹き飛ばす。
　その断面には、通常の戦造人間には絶対にないはずの機械配線がむき出しになっていた。
「そしてその回線部を出してしまえば……後は言わなくてもわかるわよね？」
「そんな……止めろ貴様まさか！」
　ヴァーミンは神経回線にカッターを突っ込み、力任せにかき回した。
「ぐぉあああああああああ!!」
「精巧な機械ね！痛みもしっかりと感じるとは滑稽だぜ!!」
　あまりの激痛に、ヤコブの意識は途切れようとしていた。
（俺は……ここで終わるのか？計画の準備も終わっていないというのに……こんなカスなんぞに……ッ）
「ぐっ!?」
　ヴァーミンの攻撃が止んだ。
　横から乱入してきたゾルに吹き飛ばされたのだ。
「虫けらがいい気になるんじゃあない……！」

「ちぃ……2対1はちとキツいわね」
形勢不利を確信したヴァーミンは部屋からそそくさと立ち去った。
「逃がすか貴様あああああああああああ!!」
「待て！」
「あの野郎をぶちのめさんことには気が済まん……！それを抑えろというのかッ!!」
「目先のことだけに囚われるんじゃあない！その配線を公の目にさらすことになってもいいのか？」
「ッ……！」
その一言でヤコブは冷静さを取り戻した。
ヤコブの正体は10年前に生産終了したはずの戦闘用アンドロイド。
しかし、とある理由でヤコブはその事実を隠し通してきた。
今部屋を出れば、他の職員にそれが露見してしまう。
それだけは絶対に避けなければならない。
「さっさと腕を拾え。直してやる。下準備の続きもあるしな」
「すまねぇゾル……本当に助かった」
そう言うヤコブの表情は、心なしか嬉しそうだった。

「見舞いに来てあげたわよ……カスケードォォォォォォォォん」
「……」
続いてヴァーミンが向かったのは、脳震盪のために病室に搬送されたカスケードの部屋だった。
今はベッドで寝ているが、すでに回復しつつる。
そうなる前に楽に始末しておこうという魂胆だ。
「どうしたの？折角来てあげたのにつれないのねぇ」

「いやお前、普段俺が怪我しても見舞いになんて来ないじゃあないか」
「そんなひどいこと言わないでよね、こちとら用があってきたんだからッ」
「ぐふっ!?」
テルミットの本気の蹴りを胸部に食らい、カスケードは吐血した。
あまりにも突然だったのでガードすることすら出来なかった。
「きゃあああああああーっ!?テルミットさん一体何をしているんです!?」
たまたまちょうど入室してきた看護師が惨状を目の当たりにして悲鳴を上げた。
「うっさいわねぇあんた……そんな大声で叫んだら殺されても文句言えねえよなァ！」
しかし、病室から出ようとしたテルミットの背中に衝撃が走る。
カスケードが銃弾を放っていたのだ。
「何ッ!?今の蹴りを食らって生きてるなんて……！」
「こういうことだろうと思って銃を懐に入れてたんでな！はぁっ！」
看護師が逃げた事を確認し、カスケードはテルミットに突撃しながら発砲した。
「フン！いい気になってんじゃあないわよ！アタシのこの体はあんたの銃弾を蹴り返せるということを忘れたかい！」
その言葉通り、カスケードの銃弾はことごとく跳ね返される。
だがカスケードはそれらの一つ一つを涼しい顔でかわしていった。
「いい気になってんのはそっちの方だぜ！俺がどれだけ長い間テルミットとペアを組んでたと思っている！蹴り方やそれによる軌道、大体把握している！」
カスケードはテルミットの足が当たらないギリギリの範囲を攻めることで有利に立ち回った。
そしてヴァーミンを壁に叩きつけ、胸に拳銃を押し付ける。
「これでお前は終わりだ、観念しな」
「そんなことあなたに出来るの？あんたなんかにパートナーの胸を吹っ飛ばす覚悟があるとでもいうのかよぉぉぉこの腐れインポ野郎

がぁぁ～ッ!!」
「……」
最愛のパートナーの口から放たれた罵倒にも、カスケードは動じなかった。
目の焦点はぶれておらず、呼吸の乱れも止まっている。
逆にビビり上がったのはヴァーミンの方だった。
(☒コノ男、本気だ……マジニ俺ヲコノ体ゴト始末シヨウトシテイル……!)
このままテルミットの体が致命傷を負えば、それを憑代にしているヴァーミンもただでは済まない。
(……ダガソレガイイ)
カスケードの指が引き金にかかった瞬間、テルミットの口から黒い粉のようなものが吹き出した。
それこそがヴァーミンの本体。
そしてテルミットから抜け出たヴァーミンはカスケードの口から体内に入り込む。
宿主の乗り換えだ。
「……えっ」
テルミットが正気を取り戻した。
その顔には先ほどまでの殺気はなく、代わりに恐怖だけがあった。
乗っ取られている間の記憶がないまま、気が付いたら胸に銃口を突き付けられてたのだから無理もない。
ヴァーミンはカスケードの体で醜い笑みを浮かべてこう言い放った。
「今までありがとうな」
引き金が引かれ、テルミットは吹き飛び、壁に激突した。
「う……!」
大ダメージだ。もはや反撃する力など残っていない。
それどころか、口を動かすことすらままならないようだ。
「おいカスケード!大丈夫か!?テルミットがこないだの虫に乗っ取られたって?!」

慌てた様子のファラデーが駆け込んできた。
そういえば、ヴァーミン達と戦っている最中なにやら口の中に異物感がしていた。
記憶はあいまいだが、ファラデーの言っていることを聞いて思い出した。
「俺は今から隊長を呼んでくる。完全なるとどめを刺してもらうんだ」
「ああ、わかった！」
「……！」
状況を理解した。
さっきまで自分の体内にいたヴァーミンが今度はカスケードを乗っ取っている。
そして、そのことを誰も知らない。
このままでは戦造人間は全滅してしまう。
「ま……待ちなさい……!!」
「おいてめーっ何逃げようとしtんだ！俺がしっかり見張ってるからな！」
ファラデーはまだテルミットが乗っ取られているものだと思い込んでいる。
こうして、ヴァーミンは易々と逃げ延び、コーディンの病室へと向かっていったのだった。

「隊長！」
「ん？どうしたカスケード」
「ご存じかとは思いますが、基地内にリバース獣が入り込んでいます。しかも奴はテルミットの体を乗っ取っている！」
「……何？」
「もう彼女は助かりません。一思いに止めを！」
「そうか……だが、どうして俺にそれを言う？」

「……えっ？いやだから、フラクチュアで確実に止めを刺してもらうために……」
「そうかい、この腕でか？」
「あっ」
　コーディンが腕の布を捲ると、そこにはカラカラに干からびた腕があった。
　とてもフラクチュアを振り回せる状態ではない。
「戦闘員には既に伝えてあるはずだぜ。なのにそのことを知らないということは……」
（シマッタ！ソコマデハ把握シテネエ！）
「とぼけるんじゃあねえ、お前が敵だって事はもうバレてるんだよ」
（抜ケ目ナイ奴トハ聞イテイタガ、コレ程トハ……ダガコイツハ腕ヲ負傷シテイル。勝機はまだ俺にある!!）
「どうした？攻撃してこないのか？」
「お望み通りしてやるよォオオオ！」
　本性を露わにしたヴァーミンは銃を連射しつつ接近する。
　しかし、コーディンは銃弾を軽くいなし、難なくカスケードの体を抑えつけた。
「ぐぐ……」
「まともに戦えるのは油断した相手だけか？」
　顔を寄せて凄むコーディン。
　しかし、それこそがヴァーミンの思う壺だった。
「油断してるのは、てめぇの方だぜ!!」
「!!」
　カスケードの体から脱出し、コーディンの口へと侵入していく。
　ヴァーミンはこの隙を狙っていたのだ。
（ヤッタ！勝ッタッ！片腕ガ動カナクトモコイツノ性能ナラ他ノ戦闘員ヲ皆殺シニ出来ル!!オ前ラノ負ケダ!!ワハハハハハハーッ）
「……はっ！」

ヴァーミンが抜け落ちたカスケードが我に返った。
「俺は一体……まさか！奴に操られていたのか？」
「あぁ……だが今終わったぜ」
「隊長!?……いや、お前本当に隊長か？」
「身構えるな、コーディン３４歳、身長１９３ｃｍ、体重９６ｋｇ」
「た、確かに本物だ……本物でなきゃこんな正確な情報は知らない……しかしヴァーミンは一体？」
「体内に入って操る能力を持っていたようだが、そこんとこが奴の敗因だな」

（ば、馬鹿ナ!?ナゼコイツノ体ヲ乗ッ取レナイ？ソレドコロカ、動ケン！）
ヴァーミンがいるそこは最早人間の体内ではまく、漆黒の空間だけが広がっていた。
コーディンを操ろうとして逆に拘束されてしまったのだ。
「俺の能力は隙間に亜空間を発生させることだ。それは俺自身の体内であっても例外ではない」
（オノレェェェェ……コノ俺ガ……こんなことでェェェェェェ～～～！）
次の瞬間、ヴァーミンの意識は消えた。
（オゲッ）
亜空間が閉じると同時に、ヴァーミンの体も圧縮されて細胞ひとつ残らずに消滅したのだから。

「えっ？ということは……もう終わりィ～!?二回に渡って続いた戦いが、今のできれいさっぱり片付いたってことぉ!?」
「人間の体を乗っ取って仲間割れを引き起こす……確かに厄介だった

がちと俺の能力相性が悪かったようだな」
「……あっ！ファラデーとテルミットがまだ俺の部屋に！早く説明してやらないと！」
こうしてヴァーミンは、今度こそ完全に撃破されたのだった。

第１３話　雷神は空を征く

「今日こうして集まってもらったのには理由がある。お前たちには、次のリバース獣との戦いに参加してもらう」
　ファラデー、カスケード、ロクショウ、そしてコーディン。
　一同は隊長室に集合していた。
「はぁ……それは構いませんが、いつもはこんな風に呼び出したりしないじゃあないですか？」
「うむ、今回はかなりの強敵でな。あらかじめ知らせておく必要があるんだ。特にファラデー、必要なのはお前だ」
「えっ、オレぇ？」
　ファラデーが間の抜けた返事をした。
「次の敵は空にいる。当然上位種だ。だからいつものビークルでは無く武装ジェットに乗りながら戦うことになる。しかし並のミサイルだけで上位種を倒すのは非常に困難！よってお前の電気エネルギーが決定打となるのだ」
「し、しかし何故次の敵が空にいるとわかるんです？リバース獣は神出鬼没と相場が決まっているのに！」
「……奴は１５０年も前からずっと生きている。俺達戦造人間の追跡を逃れてな」
「!?」
　つい最近戦闘員に就任したばかりの新人３人にとってその話は衝撃以外の何物でもなかった。
「驚くのも無理はない。だが奴は一定の周期で姿を消すのだ。必ず３０年に一度……戦いの真っ最中であってもな。これまで何人もの戦闘員が撃破に臨んだが、皆一様に逃げられている」
「失踪する、ということですか？」
「うむ。だからこそ短期決戦でなければならない！この〝ツヴァイレイザー〟でな!!」
「それは!?」

コーディンが取り出したのは重厚な拳銃『ツヴァイレイザー』。
使用者からエネルギーを吸い上げてしまう諸刃の拳銃だ。
「これは元々お前が使うことを想定して作られたものだ。だからファラデー、これから一週間お前に付きっきりで特訓を行う！こいつを完璧に使いこなせるようにな!!」
ファラデーの能力は体から電気を発生させること。
つまり、〝無から有を生み出す〟ことが可能なわけだ。
その特性を応用すれば、ツヴァイレイザーの欠点を補うことが可能だとコーディンは考えた。
「えっ……特訓～～～～～～～!?」

〝ヴァニッツ〟。
それは大型飛行機にも匹敵する大きさを持つ鷲のリバース獣。
その生態は全くもって奇妙であった。
ぴったり30年に一日だけに現れ、1時間程経つと霧のように消え去ってしまうのだ。
何故このような習性を持っているのかは不明だが、人間にとって極めて迷惑なことだった。
多くの戦造人間がそのタイムリミットの内に倒しきれずに逃してしまい、しかも次出現する時には傷が完治していたため振り出しに戻るというわけだ。
30年前、まだボイルが生きていた頃、彼もまたヴァニッツと戦った。
両者は互角に勝負を進め、どちらが倒れてもおかしくない状況だった。
「よせ！もうすぐ奴は消える！これ以上深追いすることはない!!」

「諦めろと言うのか……？そいつは無理だ！こいつは今！ここでこの俺が仕留める！」
「おい！」
ノギのの忠告を無視してボイルは空中に飛び出した。
空気を操る能力で空を飛び、ヴァニッツに接近していく。
「アアハアアア

ず素っ頓狂な声を上げた。
「最初は俺も驚いたけどよ、でも仕方のないことだぜ。なんでも過剰なエネルギー吸収をあいつの電気で補えるんだそうだ」
「それはそうかもしれないけど、あいつが射撃してるとこ見たことある？」
「……いや、無いな」
「はぁ……うまくやれるかしら……」
「まぁ、出来る限り上手く教えるよ」
「えっ？カスケードも教えるの？」
「ああ。なんだかんだ言って銃の扱いは俺が一番！ってことだぜへへへ」
「もう……調子に乗らない!!」
その日から、エネルギー制御を教えるコーディン、射撃訓練担当のカスケード、生活管理担当のノギの3人による強化特訓が始まった。

それから一週間が過ぎ、ファラデー達は向かうことになった。
「くたびれたぜ……まさかファラデーの射撃があそこまで下手くそだったとは」
「なんだよ、特訓で強くなったんだからいいじゃんか！」
みっちり鍛えられたファラデー。
カスケードは小言を言っているが、その姿からは多少の頼もしさが感じられた。
「いいか、今回はいつも使っているビークルではなく特殊武装ジェットを使う。そのため内部設備もいつもより削減されている」
「げっ、冷蔵庫が空だ！帰りの楽しみなのによぉ～！」
「それぐらい我慢しろよ！」
「しかし椅子も心なしか固いな……出来るだけ早く終わらせた方がよさそうだ」
「全員揃ったな。では行くぞ！」

４人の戦士を乗せたジェットが大空へと飛び立った。

「見えてきたぞ！」

運転席に座ったロクショウが何かを見つけた。

標的である巨大な鷲のリバース獣、『ヴァニッツ』だ。

「なるほど、デカいな……アレを相手にするのか」

カスケードは既に拳銃を構えて臨戦態勢に入っていた。

ヴァニッツもこちらに気が付いたらしく、爪を立てジェット目がけて突進してきた。

搭載されている銃火器で牽制を試みるも全く退く気配は無く、このまま衝突するかと思われた。

しかしそうはならなかった。

間一髪のところでヴァニッツは悲鳴を上げ後ろにのけ反った。

「ふぅぅ～……物体をすり抜ける弾丸！流石にこれは予測できなかったろうぜ！」

カスケードが放つ弾丸は奇妙なことに障害物をすり抜けて狙ったものだけを破壊することが可能だった。

これは特殊なエネルギーを弾に込める特訓を積んでいるからであり、これを自在に扱える戦造人間はなかなかいない。

「いやしかし！これまで何度も戦造人間の追跡を逃れている奴だぞ？もう同じ手が通じるとは思えない！」

「うっ……」

戦造人間との戦いもヴァニッツにとって初めてではない。

今までのリバース獣とは違い相手もある程度こちらの行動パターンを学習しているのだ。

「……！おいロクショウ!!あいつどこ行った!?」

「何……！」

コックピットの窓からは既にヴァニッツの姿は無かった。

「死角に回り込んだか……ファラデー！外に出るぞ！」

「えっ!!」

ファラデーは驚いているが、決して急に湧いて出てきた無茶ぶりではない。
ジェットの外に出ることは最初から想定されており、そのための訓練も既に済ませてあるのだ。
天井のハッチを開き、そこから二人は外に飛び出した。
当然何の準備もなく飛び出せば吹き飛ばされる。
しかし二人が履いているシューズから発せられる特殊な磁力が機体の上に立つことを可能にした。
しかし、それだけで自在に動けるというわけではない。
体幹でバランスを取りながら相手の攻撃を避け続けるという極めて高度なテクニックが要求されるのっだ。
「うおっとと……！」
「早く構えろ！すぐ敵が来る!!」
コーディンはフラクチュアを取り出した。
「はっ!!」
遠心力に乗って振るわれたフラクチュアがヴァニッツの翼に直撃する。
「クエエエ……」
「どぉぉぉぉぉぉ！」
コーディンの腕に更に力が込められる。
そのまま翼を骨ごと粉砕しようとするためだ。
しかし、次の瞬間ヴァニッツの羽毛がいくつか抜け落ちた。
それは鋭利な刃物のようにコーディンの全身に襲い掛かった。
「ぐあぁぁぁぁぁ……！」
コーディンが後ろにのけ反ったと同時にヴァニッツは空中に逃れた。
この敵に打撃はあまり決定打にならない。
何しろ敵はこちらよりも自在に空を飛び回れるのだから。
「モウ一撃デ落チルカナ」
ヴァニッツは既にコーディンに勝ったつもりになっていた。
それだけ絶望的な状況。

ヴァニッツが羽による攻撃を見せたのは初めてのことだった。
「喰ラエ！」
しかし、ジェットは突如急降下した。
それによってヴァニッツの攻撃は空振りに終わった。
「ムウ……！」
ヴァニッツの胴体に衝撃が加わった。
「今ノハサッキノ銃弾……何ヲ考エテイルカハ知ランガ、奴ラマダ戦ウ気デイルナ！」
地面めがけて落ちていくジェットを睨みつけ
「ソッチガソノ気ナラ乗ッテヤロウジャアナイカ！我ラ種族ハ違エド人間ノ手デ生ミ出サレタ者同士、徹底的ニ戦ウ！ソレコソガ我ガ使命ヨッッッ」
そう啖呵を切ってヴァニッツはジェットを追いかけて降下する。
追いついた時には既にジェットは地面に激突し大破していた。
「何ノツモリダ？テッキリ急旋回デモシテ不意ヲ突コウトシテイルノカト思ッタガ……」
「フン！ソンナトコロニ隠レテイタカ！サア決着ヲ……ウン？」
岩陰にいたのはコーディン、カスケード、ロクショウの３人。
そこにファラデーの姿は無かった。
「一人足リナイ……マサカ!!」
「今になって気が付いたか……今回の本命は、まだ！お前の頭上にいるぜっ！」
「何!?」
見上げると、空中にファラデーの姿があった。
ジェットが降下を始めると同時に飛び上がっていたのだ。
雷雲を背にして地面に銃口を向けている。
「貴様ラ最初カラ……！」
「食らえヴァニッツ！〝ダナーズシュート〟ッ!!」
ツヴァイレイザーの銃口に集約された電気エネルギーが放出され、半径５０ｍの円柱となって大地に降り注ぐ。
「グワァァァ

空から落ちてきたファラデーはロクショウに受け止められたが、既に体力を使い果たしたようでぐったりしていた。
「ハァ……ハァ……残念ダッタナ！今回モ私ノ勝チ逃ゲトイウワケダ！」
時間が来れば自分は消える。
そうなればこの傷も自動的に癒える。
その自信がヴァニッツを突き動かしていた。
しかし。
「オカシイ……モウ時間ハ過ギテイルトイウノニ何故私ハ消エナイ？」
「狙い通りだ。強力なエネルギーをぶつけることでお前を引き留めることが出来るらしいな……先代隊長ボイルが考案した対策だ」
「クッ、オノレ……ソレダケデ勝ッタツモリカ!?時間切レマデ待ッテ次ノ世代ニ後ヲ任セレバオヨカタモノヲ、前達ハ自ラノ首ヲ絞メタノダゾ！」
「何……後の世代に託す、だと？」
コーディンの眼がヴァニッツを睨みつける。
「違うな……問題を先延ばしにしているだけ。目の前に終着点が見えているのならば！決着をつける!!それが我々の矜持であり義務!!お前との因縁は！今日ここで打ち砕くッッ」
「オオオアアアアアアアアアアアッ！」
「フン！」
ヴァニッツが飛び出すコーディンが後を追って飛び出す。
「ばあああああああああああ！」
勢いよく突き出された拳がヴァニッツの胴体に命中する。
「マダパワー比ベヲシヨウトイウノカ！素手デコノ俺ヲ傷ツケラレル訳ガ無イコトハ既ニワカッテイルダロウニ!!」
しかし、次の瞬間ヴァニッツは呻き苦しみだした。

「ＧＷＯＯＯＯＯＯＯＮ!?」
　コーディン一人に気を取られていたため、カスケードの銃弾が目に当たったのだ。
「俺達の事忘れてたな？ちょっとショックだぜ」
「ウガアアアアアアアアアアアアアア！」
　怒り狂ったヴァニッツは空へ飛び上がった。
「ロクショウ！俺を打ち上げろ！」

「はい！」
　ロクショウは両手を広げ、コーディンの体をバレーボールのレシーブのように真上に投げ飛ばした。
「ヤハリ追ッテキタカ」
「!?」
　コーディンの体をヴァニッツの爪によって掴まれてしまった。
「急降下シテヤル！サッキオ前達ガソウシタヨウニナ！」
「ぐおおおおおお……」
　身動きが取れないまま地面に全身を強打。
「うおっ！」
　そこはカスケードが立っていた地点だった。
　コーディンを放り投げたヴァニッツは次の標的をカスケードに定めたらしい。
「てめぇ！」
　カスケードは咄嗟に銃を構えるが、至近距離では分が悪く反撃する間もなくのしかかられてしまった。
「うわあああああああ……」
「調子ニ乗ルナヨ！サッキハ不意ヲツカレタダケダ!!……ン!?」
「何……!?」
「だりゃあああああああああああああああああああああああっっっっっっっっっ！」
　コーディンとファラデーがエネルギーを帯びて突進してきていたのだ。

「馬鹿ナ!?コノパワーッッッッッッッッッッッッッッッ」
巨大な電気エネルギー波を帯びた二人の拳を受けて、ヴァニッツの腹に大きな風穴が空いた。
足をカスケードから離さざるを得ない程に消耗したヴァニッツはゆっくりコーディンの方を見やる。
コーディンも倒れそうになったファラデーの体を支えながら、激闘を繰り広げた相手へと向き直った。
「ウゥゥ……初メテノ感覚ダ……私ハ……死ヌノカ……?」
「ああ、それが死だ」
「ソウカ……ウウ……」
傍から見れば、痛みに苦しんでいるように見えるかもしれない。
怒りにとち狂っているように思われるかもしれない。
しかし、違った。
「ウワハハハハハハ!イヤア〜〜〜〜〜〜〜〜疲レタァァァァ!!」
「……!?」
ヴァニッツは笑っていたのだ。
それもひどく晴れやかな顔で。
「自分ガイツドコデ生マレタノカ、全ク覚エテイナイ……暴レテハ消エ、戦ッテハ消エ、コノ繰リ返シダッタ……ダカラ死ヌコトナンテコレッポッチモクハナイノサ……」
「……」
「楽シカッタゾ……!マタ会オウ、アノ世トイウモノガアルナラナ、フハハハハハハ……ハ……」
そう言い残すと、ヴァニッツは完全に消滅した。
もう二度と復活することはないだろう。
「はぁっつはぁっ……強敵だった……そして幸運だった……もしこの4人でなければ、確実に全滅させられていた……!」
コーディンはそこである事に気が付いた。
「……あっ」
それは交通手段のジェットが先ほどの大破していることだ。
「焦って飛び出したのがまずかったか……ジェットを壊してしまった

な。よし、お前達！基地まで歩いて帰るぞ！」
『生きて帰るまでが戦い』。そんな格言を実践するかの如く発破をかけるが、肝心の部下達はそれどころではないくらいにくたびれていた。
「無理ですよぉぉぉぉ～さっきの突撃で足くじいたからもう歩けない～～～～」
「お……俺も反対です……ていうかもう死ぬ……げほっげほっ」
「ここからだと結構距離ありますし、この二人を運んでいくとなるとまた一苦労ですよ？俺も嫌です」
「なんだと……」
一気に緊張が抜け、コーディンはその場にへなへなと座り込んだ。
「はぁぁ……俺も疲れたし仕方がない、救助が来るまで待つとするか……」

一方そのころ、基地本部のとある一室で二人の戦闘員が話し合いをしていた。
厳密にいえば、『ヤコブがトランスの首を締め上げながら脅迫をしていた』。
「なぁいいかもう一回言うぜ？これから始まる計画にお前も参加してもらう。〝はい〟か〝イエス〟のどちらかだけだ……聞き返したり拒否したりしたら即!!お前の首を切断するッッッ」
「んぐっ……んんんん……！」
所変わってメインコンピューター室。
技術班の一人がゾルに殴り飛ばされた。

それを目の当たりにした他の班員達は恐怖で青ざめている。
「な……何をしているんです!?どうしてこんな事をっ……!」
「やかましい、さっさと言われたことだけを実行しろ!!コーディンが戻ってくる前にな……!」

第１４話　機械仕掛けのリベリオン

「何も難しいことは無いじゃあねぇか……ちょっと手伝ってくれればいいんだ」
「うぐっ……」
　締め付ける力がさらに強くなる。
「なあ、このままでいいのか？圧倒的なパワーを評価されないで閉じ込められてるままでいいのかよアアーん！」
「……さい……」
「ん？何？」
「うるさいっってんだこのド外道がよおおお

「あの、あんまこういうこと言いたくないんですけど、本当に救難信号送りました？」
ロクショウが不安そうな顔でコーディンに尋ねた。
コーディン、ロクショウ、ファラデー、カスケードの４人は上位種リバース獣のヴァニッツを撃破した。
その際に交通手段のビークルが破損したため、救助を待っているのだ。
しかし、信号を送ってから既に１０分が経過しつつあった。
普段は2分もあれば来る救援が全く来ないとなれば不安も一塩だ。
「確かに呼んだ。それなのに迎えが来ないというのは、何かあったということかもしれん……」
「!!」
ロクショウとその場でぐったり寝転がっていたファラデーとカスケードはその言葉に反応した。
「この前の虫みたいなリバース獣が基地内に出たってことですか!?」
「わからん。とにかく、自分達で帰るしかないな」
「げっ！じゃあ徒歩で帰るってことですかぁ～!?」
「いや、それよりもいい方法がある。今から地面を掘って穴を作る」
「……？穴？なんで？」
トンチキな指示に三人は面食らった。
「いいから早く掘れ！横幅を広くしろ！」
わけがわからないまま穴を掘る三人
「よし、そのぐらいでいい。よっ……ぬぉあああッ！」
出来た穴にコーディンが腕を突っ込み力んでみせる。
「な……なにいいいっ!?」
３人が驚愕したのも無理はない。
穴から小型のビークルが出てきたのだから。
「び、ビークルだ……ちょっとばかり古いけど……一体なぜ!?」

「廃棄処分になる旧型を買い取り万が一に備えて亜空間の中にしまっておいたのだ。さぁ乗れ！」
４人を乗せたビークルは急加速で基地へと向かった。
「基地が見えてきたぞ、外からは破壊の跡は見えない……ひとまず第二ターミナルから入って中の様子を探るとしよう」
第二ターミナルは第一ターミナルと比べてかなり小さい。
左に旋回し、基地から突き出している第二ターミナルの出入り口へと向かって着陸を試みようというわけだ。
しかしその時、突如外壁に埋め込まれていた対空防御レーザーがコーディン達の乗ったビークルに向けて発射された。
「なっ、何ィィィ!?何故味方のビークルを襲う!?くそっ避けられない!!」
対空防御レーザーは空を舞うリバース獣に向けて開発されたものであり、普通なら味方の期待を襲うということはあり得ないことのはずだった。
至近距離からの射撃に旧型の機動力では対応できず、エンジン部が大破してしまった。
「ターミナル内部に不時着するから瞬間に全員飛び降りろ!!」
内部に滑り込むようにして入り込んだビークル。
地面に接触する瞬間、コーディン達４人はビークルから飛び降り、次の瞬間にビークルは炎上したのだった。
「うわーーーーーーーーーーっ!!」
「ぐえっ」
無事に飛び降りることに成功したロクショウだったが、自分の方向に飛んできたファラデーの体と壁に押しつぶされて蚊の鳴くような悲鳴を上げた。
しかし、そんな茶番を遮るかのように緊急サイレンが鳴り響く。
「どうやら予想以上に深刻な事態だな……」
「リバース獣がメインコンピューター室に侵入しているんでしょうか？」
「その可能性もあるが……別の線もあるかもな……中に入るぞ！どこ

に敵がいるかわからん、全員負傷している以上慎重に進め！」

「おい、見てくれ！」
カスケードが指指した先にあったのは、何かの衝撃を受けてへこんだ壁だった。
「この破壊の跡……ここで何かがあったに違いないぜ！ここから一番近い部屋を見てくる！」
「待て、カスケード早まるな！」
コーディインの制止を聞かずに走り出すカスケード。
彼を駆りたてているのはテルミットの安否だった。
「テルミット……無事でいてくれよ……！」
カスケードは不安げに呟きながら通路を進んでいくと部屋に突き当たった。
「これは……」
中に入ると、そこには大量の非戦闘員達が倒れこんでいた。
事後ではあったが、明らかに暴力の跡がそこにあった。
「おい、しっかりしろ！何があったんだ⁉」
「うう……」
倒れている非戦闘員の一人から事情を聴こうとするカスケード。
「ぞ、ゾル……ゾルに……」
「ゾル……!!」
ゾル。その名を聞いて合点がいった。
数いる戦造人間の中でも露骨なまでに反発を示していたのはゾルだけ。
周りから見ても明らかに異常であった。
そんな男が遂に反逆を開始したとしたら。
「まさかあいつの仕業だというのかッッ！」
「ゾルが……」

「何？ゾルはどうした！奴は何か言っていたのか!?」
「ああ……お前らの内一人でも足止めしろってな」
「何!?」
ゾルの話を聞いて愕然としていた隙を突いてカスケードの腰にしまわれている銃〝イレイザー〟に掴みかかった。
「てめぇ！」
非戦闘員よりもカスケードの方が銃を抜くスピードは速かった。
しかし、
「てめぇら……全員そうだってのか!?」
先ほどまで倒れていた他の非戦闘員達がカスケードの周囲を囲んで銃口を向けていた。
目の前の一人を倒すだけでは解決しない。仲間に助けも呼べない。
全員を相手にして負けることは無いだろうが、この上ない足止めを喰らってしまったというわけだ。
「畜生……！」
「はぁぁぁぁぁ!!」
「!!」
その時、凄まじい速度で部屋に入ってきた人影によって非戦闘員達は全員なぎ倒された。
「一人で不用心に突っ込むなんてらしくないじゃん、ファラデーのが移ったの？」
「お、お前……テルミット！無事だったか!!」
人影の正体は女性戦士のテルミット。
彼女の持ち味は脚力であり、それによって超スピードでの走行も可能なのである。
また、この脚力によってカスケードの放った銃弾を蹴り飛ばすという荒業も見せており、二人がコンビ足り得る理由の一つともなっている。
「ゾルの仕業なのか？」
「ええ、ヤコブの野郎も一緒よ」
「あいつら卑怯にも俺達がいない時を狙って……」

「とにかく！一旦みんなと連絡を取らないと！」
〝連絡〟という言葉に反応したテルミットの胸部のヴァイタルコアから立体映像が映し出された。
「カスケード、テルミット、無事か？」
「ええ」
「ゾルとヤコブの奴らの仕業ですよ。非戦闘員達もみんなグルだ……」
「そうか……お前たち二人はそのまま別行動で行け。二つのチームに分かれて一定の距離を保ちながら探索を続けるが、ゾルかヤコブのどちらかを発見したら一か所に合流しよう」
「わかりました」
「いーや戻らなくていい！俺がお前ら二人の相手をしてやるよ」
「何っ？！……この声はヤコブか!!」
物陰からヤコブが現れた。
どこかからずっとこちらの様子を窺っていたらしい。
「まだ、さぁ行くぜ!!」
直後、カスケードの銃〝イレイザー〟が火を噴いた。
それをヤコブはひらりと躱した。
「2対1で勝てると思ってんのか糞野郎！テルミット、追ってくれ！」
テルミットは圧倒的なスピードで走り出し、あっという間に射程距離内に入った。
しかしヤコブは焦った様子を見せない。
それどころか二人の攻撃を難なくあしらう余裕すら見せているのだ。
「なんで攻撃が当たらない……実力差は対して開いてないはずだ！」
「こないだのビークル内の戦いでお前らのスタイルは既に見切った。頭いーぜ俺ってよォ～」
「やかましい!!」
遂にテルミットの蹴りがヤコブの腕に直撃した。
「痛……ッ」
「!?」

二人が息をのむのも無理はない。
ヤコブの腕はちぎれ飛び、その切断面からは電気コードがはみ出ていたからだ。
「お……お前、戦造人間じゃないのか……？」
戦造人間は機械ではなく、あくまでも有機的な生命体だ。
しかし、目の前のこの男ヤコブの体は明らかに戦造人間のそれと違った。
「あぁぁ痛ぇなぁオイ……そうだよ俺は戦造人間じゃあねえ～……その正体はな、１７年前に開発中止になった戦闘用アンドロイドだよ!!」
「何!?」
戦闘用アンドロイド。
二人も話だけは聞いたことがあった。
戦造人間よりも先に開発されたが、戦造人間よりも耐久性が低いために開発打ちとめになったという歴史の遺物。
「まあどうでもいいことだろ？もう時間稼ぎも十分だ、お前らはここで生き埋めだ。」
「!!」
ヤコブが壁を叩く。
するとたちまち天井が崩れ去り、カスケードとテルミットに降り注いだ。
一足先に脱出したヤコブはその様子を見て満足げに笑った。
「さぁて、ゾルの所に向かうとしますかね……」

「二人との連絡が切れた……まさか敵と遭遇したのでは……」
「こっちに向かってきてるかもしれませんよ……」
残されたコーディン、ファラデー、ロクショウは集まって周囲を警戒していた。

その不安は的中することになる。
「その通りだ」
「ゾル！貴様、一体何を考えている!!」
柱の陰からゾルが姿を現した。
「見ての通り、クーデターさ。ここまで来る間にいろんな設備を破壊してきたから、他の戦闘員達はそっちの対応に追われてここまで来れないだろうな」
「とうとう本性を現したか！てめぇらいったい何のつもりだ？」
ロクショウが憤る。
「コーディン。知っての通り俺達はお前が消耗するタイミングを待っていた。悔しいがはっきり言って全力のあんたとは戦って勝てる気がしなかったんでな……そして今があんたを倒す絶好の好機だ」
「御託はいい！この場で迎え撃つ！」
「はっ！」
ファラデーとゾルが同時に飛び出し、激突した。
「うおぁぁぁぁぁぁ!!」
「うがっ!!」
ゾルの突進攻撃を食らったファラデーはいともあっさりと引き飛ばされてしまっていた。
「ふん、能力を抜きにすればお前の戦闘力は下から数えた方が早い！ロクショウ、お前もだ！俺が負ける道理はない！」
「くっ……」
言い返せないロクショウ。
ロクショウの戦闘スタイルは相手の攻撃を受け流すという独特なもの。
しかしその技は戦い嫌いな性格の賜物であり、彼は他の攻撃手段を全く持ち合わせていないのだ。
「さぁ、いつまで持つかな？」
ゾルの攻撃をひたすら受け流すロクショウ。
しかしゾルの猛攻は一向に終わる気配がない。
もし一撃でも食らえばそれだけでロクショウは戦闘不能になるだ

ろう。
「つあっ！」
「ぐっ!!」
　その窮地を救ったのはコーディンだった。
　横からのボディーブローを食らってゾルが大きくよろめいた隙を見てロクショウは間合いの外に逃れることが出来た。
（くそっ、なんて一日だ……立て続けに二連戦だなんて全く厄日だぜ！俺は戦いが嫌いだというのに……こうなったら……！）
「いてててて……ロクショウ！俺達も体調を援護しよ……おっ？ロクショウ、どこ行った？……あっ！」
　吹っ飛ばされた先から戻ってきたファラデーの目は、一目散に逃げだすロクショウの姿を捉えていた。
「オイィィィィィィィィィィィィ嘘だろロクショウ!?マジでどこ行くんだよ!?」
「うるさいッ!!二連戦なんてやったら死んじまう！俺はもう逃げるぜあばよ!!」
「……ロクショウお前さぁ……」
　ファラデーはその後姿をただ見送ることしかできなかった。
「お前は反逆者だ。このまま再起不能になってもらうぞゾル！」
「いいや、まだだ……そろそろ〝切り札〟が来る頃合いだからな」
「何？」
「ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
　数々の修羅場を潜り抜けてきたコーディンも驚きのあまり手を止めてしまった。
　敵になるはずがないと思っていたトランスが壁を突き破ってコーディンに襲い掛かってきたのだから。
「トランス!?馬鹿な、まさかこいつらの味方なのか!?」
「その通り!!今この癇癪女はお前の敵だ!!さぁやれ!!」
「GRORYAAA

「ぐっ!?このパワーは……!!」
全力で振り下ろされたトランスの拳。
大して筋肉質には見えなかったが、それを食らったコーディンのガードを一発で崩してしまうほどの破壊力があった。
「よぉ、今来たぜ」
「ふん、遅すぎるぞヤコブ……」
ヤコブが駆け付けた。
彼の役目はカスケードとテルミットを別室に隔離することでコーディン陣の戦力を削ぐことだったようだ。
「あいつらは能力こそ平均的だが、集団戦においては意外とそういう奴が邪魔になるからな……で、トランスは上手い具合にやってるみてえだな!」
「ああ、あの女がここまでのパワーを秘めていたとは驚かされたぜ……」
「あいつをこっち側に引き込んだ俺の手柄だな、ヒヒ」
ヤコブの顔は心なしか嬉しそうに歪んでいた。
「くたばれっくたばれっっっクタバレぁぁアアア

その圧でトランスが一瞬怯んだ隙を見て逃れた。
「はぁっ……はぁっ……トランスの力は危険だということは把握していたが、こんな最悪な形でそれを見せつけられるとは……うぐっ……あぁぁ……」
吐血しそうになるのを抑える。
今はなるべく出血を避けたいという判断からか、あるいは単なる製造本能がそうさせたのか。
しかし敵はそんなことを考えている余裕を与えてくれなかった。
「余計なことをするんじゃあないッ！とっととくたばれ!!」
「ゾル!?っゴハァッ!!!」
みぞおちを狙った無慈悲な一撃。
それを食らったコーディンの口からはダムのように血が噴き出した。
「最強と呼ばれている男に止めを刺すのはこのゾルにこそ相応しい……」
壁にもたれかかった姿勢から動けないコーディンは必死に考える。
(避けなくては……しかし動けん……はっ!!)
「隊長コーディン、その首もらったァァ～ッ!!」
ゾルの手刀がコーディンの体を引き裂こうと振り下ろされた。

しかし、なんとコーディンはそれを左手で受け止めた。
「何だと!?何故俺の攻撃を耐える……はッ!!」
瞬間、ゾルはその理由を理解した。

コーディンは壁と自分の体の隙間に手を入れ、数々の戦いを共にしてきた鈍器〝フラクチュア〟を取り出し、それを床に突き刺すことで支柱としていたのだ。
「そんな、そんなバカな……！」
「……ゾル」
「うっ!?」
「……お前を潰す」
その言葉を聞いて、ゾルの顔がみるみるうちに絶望に染まっていく。
「あぁ……違う……俺だ……俺が勝っていたのに……！」
彼は気づいたのだ。
今この瞬間、勝機は完全に潰えたということを。
「うおおああああああ

〜〜〜〜!!!!??」
あまりの激痛にゾルの口からはもはや苦悶の声すら出ない。
「オルああァァァァァァァァァァッッッッッッ!!!!!!!!!!!!!!!!」
止めの一撃。
それでヤコブの体はコーディンの射程を離れ、壁を５つもぶち抜いて、先ほどゾルが設備を破壊したエリア。
対応に追われている大勢の戦闘員達がひしめくど真ん中に墜落した。
（勝利は目前だった……なのに……なぜ……）
「グオオオオオオオオオオアアア

コーディン達の激闘を横から見ていたヤコブは鼻で笑った。
「隊長さーん……偉そうに啖呵切っとりますが、俺が残ってるってことを忘れてねぇか？今度こそ終わりだろうよ」
「おいヤコブ!!お前の相手はこの俺だ!!」
ファラデーが立ち塞がる。
しかし、ヤコブは余裕を崩さない。
「あのなぁファラデー。お前じゃあ俺には絶対勝てねぇんだよ」
「うるせぇ!!スパァァァァァキンッ!!!」
ファラデーの拳から電流が飛び出す。
しかし、そのエネルギーはヤコブの腕に吸われていった。
「何!?」
「ああ、言ってなかったか？俺はアンドロイド。お前の電気は無意味だファラデー!!」
「そんな……なら炎はどうだ！ステージ2!!」
ファラデーは勢い良く手をかざすも、炎は出てこない。
「エネルギー切れだな……もういいだろ？俺に従うかどうか、隊長が死ぬまでに考えておけよ」
ファラデーを放置してコーディンのもとへ向かうヤコブ。
「クソッ……また背中を見てるだけかよ……俺って、もしかして強くないのか……？」
無力感に打ちひしがれるファラデー。
「いいやファラデー……お前は強い!!攻撃するんだ!!!」
後ろから聞き覚えのある声がする。カスケードだ。
カスケードとテルミットがよろめきながらも駆け寄ってくる。
部屋が崩れる瞬間、テルミットがカスケードを抱えて反対側から脱出し、回り道してここまで戻ってきたのだ。
「無理だ……もう俺にそんな力は無い!!」

「いーやファラデー……撃ってみなきゃわからねぇ！ツヴァイレイザーを使うんだ!!!」
カスケードはファラデーの腕に自らの手を添えた。
その手は暖かく、弱弱しいものの強い希望に満ち溢れていた。
「……オッケーわかったぜ！」
ファラデーは腰のホルスターから新型拳銃〝ツヴァイレイザー〟を取り出し、震える手で引き金を引いた。
その瞬間、眩い光が銃口から放たれ、ヤコブが走っていった方向へと一直線に飛んで行った。
「……何!?ぐおおおおおおおお!?バカなッもうエネルギーは無いはずなのにイイイイイイ……」
その破壊エネルギーをもろに食らったヤコブは為すすべもなく吹き飛ばされたのだった。

コーディン：重傷
ファラデー：重傷
カスケード：重傷
テルミット：比較的軽傷
ロクショウ：軽傷
ゾル：重傷
ヤコブ：大破
トランス：比較的軽傷

こうして、主要メンバーは全員を巻き込んだ戦いは幕を閉じたのだった。

第１５話　下町アポカリプス

「えっ！休みをくれるんですか！」
　テルミットとロクショウの二人はコーディンに呼び出されていた。
「二人とも、町に降りて欲しい。トランスと一緒にな。５０万やる。好きなように使っていい」
「５０万!?あっ行きます行きます、喜んで！」
　その金額を耳にして、テルミットは一気に食いついてきた。
　それも無理はない。
　決して手取りが低いわけではないが、それでも５０万を自由に使える機会は滅多にない。
　それをポンとくれるというのだ。
「わざわざこんなことをするのは、トランスのメンタルケアだ。あいつの底知れぬ潜在能力の危険性は彼女の精神の不安定さに依存している。極力彼女の心が開けるように計らって欲しい」

「はいというわけで！やってきました繁華街！いや～新鮮ッ！」
「はぁ～」
　テンション上がりまくりなテルミットと違ってロクショウは乗り気しない様子だ。
（ああは言ったものの、正直かったるいって気持ちは変わらずにあるぜ……いつも通り本部にいるつもりだったからなァ～）
「二人とも、そこの店入ろう！」
「ん、おう」
「……はい」
　テルミットが意気揚々と指揮を取っている。トランスも黙って二人の跡を追う。
「楽しみだったのよね！どれにしようかな～やっぱこのベリーフラペ

チーノとか？いやでもこっちのキャラメルマキアートもいいなぁ～」
　滅多にお目にかかれないメニューにテルミットは目を輝かせている。
「そんなもんかな？俺にはようわからんが」
「なんか言った？」
「いいや何でもない。あっ、俺はペリエで」
（何よりトランスと一緒というのが一番の不安要素だぜ……こいつ、暴走するとあの隊長を追い詰めるレベルにまで強くなるらしいからな……第一俺らにメンタルケアが出来るかよ……）
　トランスはそんな二人の様子が目に入っていないかのようにうつむいていた。
　心なしか、過呼吸気味にも見える。
　果たしてトランスの心に積もった彼らにトランスの

「うぐっ……」
　廊下を歩いていたコーディンは激痛に襲われ、脇腹を押さえる。
　先の戦いの傷がまだ完全には癒えていないのだ。
　我を忘れて暴走するトランスに対して、コーディンは本気でぶつかった。
「お前は……俺に敵わない！」
　そう言ってトランスの敵意を鎮めたのだ。
「お疲れ」
「ありがとうございます、ノギさん」
「……まだ痛むとは、余程のダメージだ」

「あれは一か八かの賭けでしたからね……もしあそこで奴が落ち着かなかったら、俺はきっとトランスに殺されていたでしょうね」
「そうか……やはり今の世代の強さは凄まじいな」
「ええ……コントロール出来るようになってもらえればいいんですが。トランスだけじゃない、あいつにも……」
「ファラデーのことかね」
「ええ、そのために今回あいつを呼んで……って、いねぇ!!??」
本来ならファラデーがいるはずのトレーニングルームはもぬけの殻だった。
「あの野郎すっぽかしやがった！まだ病室に!?」
「いや、病室からは既に抜けたそうだが……」
「だったら……」
駆け出すコーディン。
「食堂か!?」
いない。
「だったらトイレか!?」
「ファラデーですか？見てる限りだと入ってないですね、ハイ」
これはその場にいた隊員の証言。
「俺の部屋のベッドの下かァ!?」
「落ち着けよコーディン……いたら大変だろそんなところに……」
珍しく取り乱しているコーディンをノギがたしなめる。
「はっ！さてはあいつ……！」
しかし、何か思い当たることがあったのか、コーディンは部屋を飛び出していってしまった。
「おいコーディン！どこへ……行ってしまったか」
しかし、その後ろ姿を見てノギは微笑みを見せた。
「久しぶりに見るな、彼のあんな表情は……」

「あの、すみません！」
「ん？」
声をかけられたロクショウが振り向くと、そこには一人の少女がいた。
戦造人間ではない、一般人だ。
「お兄さん、戦造人間ですよね？えっと……その……サインください！」
単刀直入に切り込んでくる。
「うーむ、サイン？ちょいと待ってな……ホレ」
さらさらと慣れた手つきでサインを描く。
こんなこともあろうかと普段から練習しているらし
「ありがとうございます！やったー！これで儲けるぞぉ～！」
「うん？儲ける？おい、どういう意味だ！転売でもすんのかよ？」
「こらロクショウ、あんまり大人げないことしないでよね」
「……わかってるよ」
立ち上がって追いかけようとしたところを大人しく座りなおすロクショウだったが、その矢先に事件は起こった。
「ねぇ嬢ちゃん……チョット……顔貸しておくれよ……うぶぶ……」
「えっ、ちょっとなんですか、やめてください！」
「暴れんなよォォォいいからこっちに来てくれよォォォォォ」
先ほどの少女がブヨブヨに膨らんだ男に絡まれているところを発見した。
少女は抵抗虚しく路地裏へと引っ張られていく。
「おっと？あれはもしかしてェ、事案か？」
その様子にロクショウはわざとらしく反応して見せた。
「ちょっくら人助けしてくるぜ。テルミット、勘定お願いな」

「えっ、ちょっと！」
　ロクショウは一目散に店から飛び出した。
　走りながらも笑いを堪えきれない。
（ラッキィィィィ～ッ！脚力お化けのテルミットにとち狂うかわからんトランスと一緒に会食？まっぴらごめんだぜ！あいつらと一緒にいたんじゃ気が休まらねぇ！ここはか弱い一般市民を救うことを口実にしてトンズラだぜ！ひゃっほぅ!!）
　喜び勇んで路地裏へ駆け込む。
「んっん！ちょいとあんた！そんな小さい女の子にちょっかいをかけちゃいかんでしょうよ。ちょいと一緒に来てもらおうか。」
　ロクショウはさも今たまたま通りがかったかのような素振りをしてみせる。
　少女の首筋を掴んでいる不審者はブヨンブヨンと肉を震わせ振り返った。
「さっきの人……！」
「んんん？どこにだいぃぃぃ？」
「警察さ。法律」
「いやいやいやいあぁぁぁそりゃ嫌だよ……あんちゃんに相手してもらいたいなァァ～」
「はぁ？」
「おぼバァァァァ～～～～～……！」
「!?」
　男が突如痙攣したかと思うと、口の中から蠢く何かが飛び出してきた。
「これは……なんだ!?」
　出てきたのは紐状の、ウナギか何かのようなリバース獣だ。
「マジかよ……！」
　リバース獣の先端部分から口が現れ、牙を向いてロクショウに襲い掛かった。
　ロクショウは慌てて身を引いたが、小指を食いちぎられた。
　あと一瞬遅ければロクショウは右腕を失うことになっていただろ

う。
最悪体内に入り込まれて内部から食い破られる可能性すらある。
ふと死体を見やると、そこにはもう男の姿はなく、あるのはただの皮だけだった。
内臓らしきものはなく、濁った液体が漏れ出ている。
それはまるで無造作に捨てられた使用済みコンドームのような光景だった。
（この男も中身を食われた被害者っつーわけか！デブなんじゃなくて内臓を丸ごと食われ、このリバース獣の体液によって肉がむくんでたんだ……いや待て、真っ先に心配すべきは……）
先ほどサインをねだってきた少女がすぐ近くにいる。
彼女は戦造人間ではない、普通の人間。圧倒的に脆く、弱い。
それ故に、何よりも優先して守らなければならない。
それこそが戦造人間の使命だ。
「助けて……」
「仕方ないな……俺も戦造人間だ、一般市民を守る！ひとまず逃げるぞ」
ロクショウは少女を軽々と抱え、全力疾走でその場を離れた。

都市の中に敷かれた道路。
一般的な乗用車でドライブを楽しむ男性が一人。
突然、彼はドンと車体が揺れるのを感じた。
「うん？何だ、何か降ってきたのか？」
「おい、車止めるな」
「……ひぃっ!?」
男は驚愕した。
車の上には少女を抱えた男が乗っていた。
それも戦造人間だ。とても逆らえない。

「悪いけどそのまま走り続けてくれ、スピード出してな……追われてるんだ」
「追われてるって……うわあああぁぁぁぁ!?」
背後に搭載されているカメラは、凄まじい速度で低空飛行する紐状のリバース獣の姿を捉えていた。
「逃ゲルツモリカァ～？スットロイゾ！」
「速い！仕方ないな……」
抱きかかえられた少女は何かを察した。
（この人の体……緑色に光ってる？）
しかしその疑問に考えを巡らせる暇はなかった。
瞬間、ロクショウは回転を加えて少女を道へ投げ飛ばしていた。
「ウッヒャァ！命惜シサニガキヲ見捨タカ!!」
「見捨てる……？このロクショウ、どんなに落ちぶれてもノルマを放棄することは決してない……」
「!?」
時速２００ｋｍで走行する乗用車の上から投げ飛ばされたにも関わらず、少女は平然と立っていたのだ。
「馬鹿ナ？ドウシテ……」
「彼女に気を取られたお前は急に止まれない」
「ウグッ、シマッタ！」
勢いのまま突っ込んでしまい、ロクショウにがっしりと掴まれてしまった！
「抱かれるのは好きか？そしてこの車はもうすぐ坂に行きつく。このまま一緒に落下しようや！」
車が坂の手前で勢いよくカーブしたのと同時にロクショウは崖の下へと勢いよく飛び降りたのだった。
「はぁっはぁっ、民間人になんて危ない事させやがるんだチクショウ!!今度会ったらクレーム入れてやるから覚悟してろよ!!……おっといけねぇ今はそんなことより」
男は先ほど走った道を戻っていった。先ほどの少女が心配になったからだ。

彼女自身、自分に起こったことに驚いていたらしく、その場に座り込んでいた。
「嬢ちゃん、大丈夫かい？さっき投げ飛ばされたように見えたが」
「そうなのよ……私、確かに投げ飛ばされたはず……なのに、全然何ともない！道路のちょっとした段差飛び降りた程度の衝撃しか感じなかったわ!!一体どうして……？」

「ふーっ……なんとかこいつをあの子から引き離せた。しかし……」
先程のクレバーな言動から一転、ロクショウは頭を抱えた。
（ああカッコつけたはいいものの、俺一人でこいつを倒せるとは到底思えないんだよなぁ……しかも今の逃走でテルミットとトランスがいた茶店から余計離れちまった……二人が駆け付けてくれるまでこの窮地を凌げるだろうか……？）

「あなた戦造人間でしょ？だのにどうしてそんなに弱いのよ！民間人からこんな風に罵られるぐらい頼りないなんて、恥ずかしくないの!?」
「おい……恥なんざこれっぽっちも無い。なぜならこの状況を打破する最強の手段を持っているからだ。それは……」
「逃げる」

「おーい、テルミット！」
聞き覚えのありすぎるデカい声にテルミットはビクッと跳ね上がった。
超えのした方を見やると、トレーニングの予定が入っていて自由が無いはずのファラデーが悪びれる様子もなく大手を振って駆け寄っ

てきていた。
「ファラデー!?あんた今日から隊長付きっ切りのリハビリに入るって聞いてたけど、すっぽかしてきたの!?」
「へーきへーき!」
「そうとも」
ファラデーの後ろからニュッと現れたのはカスケード。
「ちょっとカスケードあんたまで!二人して無断で抜け出してきた……ってコト!?」
「わわ……」
テルミットの大声に臆したのか、はたまた男子二人の大胆不敵さに度肝抜かれたのか、トランスは縮こまった。
丁度その時、まるで二人を待っていたかのようにテルミットの胸のヴァイタルコアが振動した。
ヴァイタルコアは戦造人間の黒い装甲表皮を生み出すだけでなく、通信機としての役割をも担っている。
「ロクショウからの緊急信号!あいつ手洗いしてたんじゃあなかったの!?」
「丁度いい!助けに行こうぜぇ〜!特訓の代わりだ!」
「あーもーまた勝手に行こうとして!マジでシバかれるわよ!?」
しかし、最強と謳われるコーディンの指示を無視した男どもが今更テルミットの忠告を聞くはずもなかった。
「そんなこと言ってる場合か?ロクショウが死んじまう、さっさと行くぞ」
さっきと打って変わって冷静な態度にテルミットは呆れかえった。
もっともこんな流れにはもう慣れっこだったが。
ファラデーに比べれば常識人のように思えるが、カスケードはカッコつけたがる節がある。
人気のないイレイザーを好んで使っている一因もその性格だ。
「はぁ〜……ファラデーと一緒にバカやってるってのに何クール気取ってんのよ……ごめんねトランス、ここで待ってて!」
うつむいていたが、ゆっくりと顔を上げる

「いえ……一緒に行きます……！」
テルミットは一瞬躊躇するも、頷き、走り出した。
トランスの目はまだ不安で揺れているように見えたが、それを咎めている暇はないのだから。
何より、その様子を咎めることがテルミットには出来なかったのだ。
そこにかつての自分を重ねて……

5年程前、テルミットがまだ訓練生だったころ、彼女の心もトランスのように荒んでいた。
理由はないが、すぐ嫌われているような気がしてしょうがない。
漫然と退廃的な思いをくすぶらせていれば行きつく先は破滅だ。
しかし、彼女の場合はそうならなかった。
自分と同じように不安や痛みを抱えている人物と出会ったからだ。
その名は――――カスケード。

ファラデーを追って街に降りてきたコーディン。
しかし今、そんな些細な問題は理不尽にも吹き飛んでしまっていた。
「そんな馬鹿な……なぜお前がここにいるんだ……15年前に消えたはずのお前が!?」
コーディンは明らかに狼狽えていた。
ファラデー等の部下達には今まで決して見せたことのない顔だ。
「ウフフフフ……久しぶりね、コーディン♡」
バースコーポレーション戦力部隊隊長コーディン。
彼の眼の前に佇んでいるのは、かつてボイルとの闘いで行方知れずとなったかつて幼馴染、ミセルの変わり果てた姿だった。

次回　第16話　〝悪魔か天使か〟

第16話　天使か悪魔か

草木生い茂る森の中に入ってから、ロクショウはひたすら逃げに徹していた。
敵が自分一人では到底敵わない相手であること、仲間が来るまで待ったほうが良いということをわかっていたからだ。
しかし、相手はふわふわと宙に浮いている蛇とも鰻ともつかない奇妙な生物。
木などの障害物を巧みにかわし、接近してくる。
加えてロクショウ自身には大した攻撃技がなく、本当に避け続けるだけしかできない。
そんな攻防を繰り返していては、やがて追い詰められるのも時間の問題だった。
白い体が、ロクショウの首を締め上げる。
「うがっ……！」
絹のように柔らかそうな皮膚をしていたが、そんな外見からは想像もつかないほどの凄まじい力だ。
（こいつ……ふざけた見た目とは裏腹に凄まじいパワーとスピードを持ってやがる！）
「テメェヨォ～ヨクモ余計ナコトシテクレタヨナァ～セッカク気持ちよく女の子の選定シテタッテイウノニヨォ～」
「ゲッ！」
ロクショウは首を絞められ、宙に釣り上げられた。
元々ロクショウに大したパワーが無いことも相まって、限りなく〝詰み〟に近い状態だ。
「テメェモ食ッテヤリタイトコロダガ、ソレダトイズレ足ガツク……シンプルニ首ヲネジ切ッテヤルコトニスルゼ！」
「ぐわあああああああ！」

▪

万事休すな状況。
しかし、突如リバース獣の力が緩まった。

「コノ俺ニ背後カラ攻撃を食ラワセルトハ……」
その声が向けられた先には、ロクショウの救難信号を聞いて駆けつけた戦造人間の一人テルミット。彼女が蹴りを入れたことで気を取られたのだ。
「とんだ邪魔が入ったなぁ～……こいつの仲間か……」
テルミットに続いてファラデー、カスケード、トランスもやってきた。
「遅かったな……半年以上待たされたかのような気分だぜ」
「ごめんて」
これで戦造人間が５人揃ったことになる。
「マァイイダロウ……ドウセソイツハモウ既ニ戦エナイ体ニナッテイルンダカラナァ～オ前ラヲ片付ケタ後デイツデモ始末デキルトイウワケヨォ」
「何それ……私達のことなめてんの？」
「ナメテイル、ダト？フザケロ！相手スベキハタッタ４人！コレヲ恐レロダナンテ、土台無理ナ話サ！オ前ラコソ、俺ノコトヲ何モ知ラナイダロウ？教エテヤルヨ、俺ハナ、ソレコソ１００年以上前カラズット今ト同ジヨウニ人間ノ内臓ヲ食ッテ、ソノ抜ケ殻ノ中ニ入ッテ楽シク遊ンデタノサ……シカシ、嗅ギツケテ邪魔シヨウトシテクル奴ラガ現レタ……誰ダト思ウ？ソウ、ゴ存知戦造人間共！」
「！」
自分たちよりも
なのに尚こいつがのうのうと生きているということは、先人は敗北したということに他ならなかった。
「何度モ何度モ、決マッテ数十人近クノ大所帯デ俺ヲ討伐シニ来タ、オ前ラト違ッテ！デモ駄目ダッタ、俺ニハ敵ワナイッテワケ！ギャハハハハハハハ!!」
「みんな気をつけろ……そいつのパワーは凄まじいぞ」
ロクショウが忠告する。
こいつは上位種のピラミッドの中でもかなり上の部類だ。
実際に触れたからこそロクショウにはそれがわかる。

「教エテヤロウカァ～？寄生虫トハ違ッテヨォ、俺ハ自分ノ力デ人間ダッタモノ、ガワヲ操縦シテルノサ。ソレヲコンナ細イ体デドウヤッテルカ、気ニナルカイ？……ドウセ多人数相手ダ、答エヲ見セテヤロウ！」

「!?」

白いリバース獣はおもむろに両腕を広げる。

すると、その体に変化が起き始めた。

豆腐のような白い体が蠢き、変形していく。

先程まで軟体動物のような外見だったが、それがたちまち角張ったものへと変わっていく。

突起が生え、角張った形を帯びていく。骨格が出来上がっていっているのだ。

そうして伸びたは更に細かく分岐していき、四肢を形成する。

そうして体の表面積が増え、先程までのぷよぷよした肉が強張り、重さが増していく。

そこにあるのは鍛え上げられた戦士かのような筋肉だ。

「なんてことだ……こんな奴が今まで存在したか？いや、ない！なんなんだコイツは!!今まで戦ってきたリバース獣は下級上級問わず既に存在している生物に近い生態を持っていた……だがこいつは違う！決まった形が無いんだ……不定形なんだ！そ、それに、それにこの形はまるで！〝人間〟ッ！」

「Ｈｅｌｌｏ，ｉｄｉｏｔｓ……おっと、そうだ。今後私のことは〝ロバート・チャールズ〟とでも呼ぶといい」

体は異常に白く、眼球は奇妙な色合いをしているが、それ以外は人間と遜色ない風貌をしていた。

「ああ、そうだ。私のことなら〝ロバート・チャールズ〟とでも呼ぶといい」

人間のような名を名乗るその生物は、リバース獣特有の片言ではなく、流暢な言語を発した。

これもまた奇怪なことであった。

「なん……」

カスケードの言葉は腹に膝蹴りが炸裂したことで中断させられた。
「勝負は既に始まっている」
「カスケード！」
ファラデーは攻撃で生じた隙をついて、ライディーンの炎で攻撃しようとした。
ライディーンとは、ファラデーが持つ超能力の名前だ。
電気を発生させるステージ1を基本とし、更にそこから派生したステージ2で炎を操ることが出来るというわけだ。
「甘いなァ……考えが甘いぞ小僧」
しかし、ロバート・チャールズはその燃え盛る拳を軽々と受け止めた。
「今までそこのロクショウとかいう唐変木でもこの俺とやりあえていたのは、ただ俺が細く小さかったからというだけに過ぎない……サシでの勝負ならそれでもよかったが、複
こうして体格が一緒になれば話は変わる！パワーのみが物を言うというわけよぉぉぉぉっ！」
「遅いぞクソカス共！その程度の戦闘力で俺を倒せるなどという非現実的な発想を1秒でも抱いていたのかァァァァ～!?」
「はあああああっ！」
「さっき俺を蹴ったのはお前だな～？」
「がっ、あぁ……！」
ロバート・チャールズの手がテルミットの頸動脈を締め上げる。
（ダメ……なんとかしな……い……と……）
テルミットの意識はたちまち闇の底へと沈んでしまった。
「気絶したか……」
ロバート・チャールズ白目を向いてぐったりとしたテルミットの体のラインをまじまじと見つめた。
「う～ん」
ファラデーやカスケードを放置し、テルミットの体を弄り始めた。
「貴様！……汚らわしい手で触れるなァァァ～ッ!!」
怒髪天を衝き、カスケードが銃を乱射しながらロバート・チャール

ズへと激突していった。
「どいつもこいつも学習しないな！」
「ぐおっ！」
ロバート・チャールズのパワーで、カスケードは吹き飛ばされてしまった。
（大抵のリバース獣は俺達よりも強いパワーを持っているもんだ！しかしそれでも俺達が勝ってこられたのは、体構造の違いの要因が大きい……しかし今コイツは俺達と同じ体格！そうなれば、最早格闘戦において弱点は無いのか!?）
カスケードの脳裏によぎった、諦めの思考。
これまで大勢の戦造人間が挑み、散っていった敵にたった5人で叶うものだろうか？
「さて、当初の予定通り最初に殺すのはお前だ！」
「!?」
先程までテルミットの体を撫で回していたのに、もうロクショウの近くまで移動している。
気絶した女性に対する興味は失せ、止めを刺すことに決めたらしい。
「ロクショウ～ッ！」
ファラデーの悲痛な叫び。
しかし、ロクショウはそれを風に吹かれた柳のように華麗に避けてみせた。
「何……？」
「……やっとこさ見切れたぜ」
もう一発と拳を打ち込むも、それすら躱される。
「何故だ、どうして攻撃が当たらない……!?」
「……俺を始末しようとするにあたって、人の形になったのは間違いだったな」
「何だと!?いっちょ前な口を叩くな！」
「なぜ当たらない……!?」
「俺のこの拳法は、避けることのみに特化している。具体的に言うと、

相手と自分の気を衝突をクッションのように利用して軌道を反らせているんだ……相手が人なら特にやりやすいというもの！それに、さっきまでお前がリバース獣かわからなかったが……イカだな？体表のぬめりのお陰で力を流しやすいぞ、！確か〝イカは空を飛ぶ〟なんて書いてあった本もあったっけな……」

悠長に話を続けるその様に、ロバート・チャールズは苛立ちを隠せなかった。

「ぐぬぬ、貴様ァ～！さっきの車の件といい、どこまでも俺を苛つかせる！」

ロクショウはロバート・チャールズの攻撃を巧みにかわしつつ、一番近くにいたカスケードに目配せした。

その目から、カスケードは何か意図を感じたらしく、慌ててファラデーに呼びかけた。

「ファラデー！今のうちに集合してくれ！ロクショウが時間を稼いでくれている間に、ツヴァイレイザーの構えを！」

「すまん俺、腕を負傷しちまって……両腕じゃないとツヴァイレイザーは扱えねぇよ」

「考えがある。そのツヴァイレイザー、俺に渡せ！」

「え？」

ファラデーは困惑した。

ファラデーのライディーンから発生する無尽蔵のエネルギーを前提とした武器。

それ故並の戦造人間が扱おうとすると、生命エネルギーを吸いつくされて死んでしまうはずだ。

「だからお前は俺の手を握っていてくれ。俺の体表を通してお前のエネルギーを流し込む！」

「あ～……その手があったか！」

「感心しながらでいいからさっさと取りかかれ！時間がない！」

ファラデーのエネルギーがカスケードの手を伝ってツヴァイレイザーへと流れ込んでいく。

ロクショウの回避術はその時間稼ぎにうってつけだった。

しかし、停滞は長く続かなかった。
ロバート・チャールズは苛立ちを顕にして怒鳴り散らす。
「えぇい、もうこんな茶番は沢山だ！拳状で当てられないというのならッ！腕だけを元の紐状に戻し！先程のように縛り上げてやるだけだ～～～～！」
腕を変形させてロクショウの胴を縛り上げ持ち上げた。
さっきの状況に戻ってしまった。
「白い腕、ヌルヌルした触感……お前、もしかして〝イカ〟のリバース獣なのか？」
「俺の名はロバート・チャールズだと言ったはずだ！」
「ぐあああああ…」
手には吸盤があり、その一つ一つがロクショウの顔に吸い付く。
次第にそれは鉤爪のように尖り始め、白い液体が分泌され始めた。
その液は謂わば精子のようなもので、ロクショウの肌をジリジリと焼き焦がす。
「うぐぁあぁっ……！」
ロクショウは思わず苦悶の声を上げた。
「クハハハハハーッ俺の変幻自在さを甘く見たのが命取り！ザマァミロ～ッ……!?」
後頭部に強い衝撃。
それは、トランスによる攻撃だった。
しかし、その顔はひどく紅潮し、目も血走っている。
明らかに暴走している。
「さっきから何なんだ……こいつを始末しようとすると決まって邪魔が入る……」
「ウゥゥ～……ガァァァァ～ッ！」
トランスの拳がめり込んでいる。
普段から筋肉質であるトランスの体だが、今はそれが更に盛り上がり、加えて白目をむいている。暴走しているようだ。
「フン、弱そうな」
「弱そう？とんでもない……なんならこいつが一番強いまであるぜ」

「ウウぁっ～～～～～～！」
勢いのままロクショウにも襲いかかろうとしている。
しかし、不思議なことにロクショウの心は落ち着いていた。
「待ってくれないかトランス！俺は何もお前と戦う気はねーんだ。お前をかき乱そうだなんて思っちゃいない。何しろ俺自身うんざりしているからな」
トランスは、止まった。
「お前、ストレスを感じてる口だろ？だからそこに介入されてると精神バランスが崩れる」
「ア……」
息切れしながらもロクショウの話を聞き続けるトランス
彼女のどことなく表情が和らいだように見える。
「お前は悪党じゃねえ、俺はちゃんとわかってる。……あいつらもきっと同じだろうよ。だからさ……」
ロクショウが最期まで言い切るよりも先に背後にロバート・チャールズが回り込んでいた。
「お話が長いよ」
その手刀がロクショウの背中をかっさばく寸前。
「ウグッ!?」
ロバート・チャールズは止まった。
いや、止められた。
「……トランス！」
「うぅ……ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
怒りに任せたものではない、狙いすましたトランスの拳がロバート・チャールズの胸部を貫通したのだ。
「が……ああ……馬鹿な……！こんな……これは……！」
ロバート・チャールズのその顔は、驚きに引きつっていた――
かに思われた。
「……好都合だ」
その真意は、狡猾な喜びに過ぎなかった。
心臓部分を貫かれたにも関わらず、ロバート・チャールズは平然と

しているのだ。
「俺の体は自在に変形できるんだ…心臓が胸部にあるとは限らないだろ？そこに考えが至らぬとはなぁこのマヌケがぁ～！」
そういうロバート・チャールズの腕からは白い液体が滲み出、トランスの全身を覆い始めた。
「これが何かわかるか……クク、これは俺の精子さ」
（精子!?イカは腕から精子を出すという話を聞いたことがあるが……まさか！）
「うあぁぁぁぁぁぁ!!」
ゆっくりとだが精子が繊維に染み始め、やがてトランスの全身を焼き焦げるような激痛が走り始めた。
「さぁ孕め！全身で俺の子を孕めっメスクズがァ～!!」
「……止めろ！」
「!!」
このまま精子の量を増やされていたら、たちまちトランスは絶命してしまっていただろう。
しかし、そうはならなかった。
「トランス……早く腕を抜いて逃げろ……！」
「!?」
ロクショウがロバート・チャールズの腕を抱きかかえ、トランスから引き離したのだ。
無論、依然として精子は流れ続けており、そのダメージはロクショウに行く。
「アァ……ロク……ショウ……？」
「早く行けーッ！俺だって早く逃げたいんだーッ！」
ロクショウの悲痛な叫びを受けて、トランスの表情から強張りが薄れた。
冷静さを完全に取り戻したようだ。
「ウゥ……ッ」
言われたとおり自身の腕を胴体から引き抜いて逃走した。
しかしロバート・チャールズはそれを追いかけようとはしなかっ

た。
どの道全員始末する。その順番が変わるだけだからだ。
「お前、この俺に対して抱かれるのが好きかとか言ってたなァ～……いっちょまえにセックスアピールしてた割にはかなり苦しそうじゃないかァ！お前の次はさっきの女、足がデカい女、残り二人の小僧にもお前同様俺の精子で犯し殺してくれるわーッ！」
「それはどうかな！」
「何？」
「俺達戦造人間の胸に付いてるこの装置、〝ヴァイタルコア〟っていうんだがよ……俺達が今着てるこの黒いスーツもこいつから生成されてるんだ、便利だろ？……そして今、こいつを取る！」
肘を器用に使って自身の胸部にされていたヴァイタルコアを回した。
ロックを外されたその瞬間、彼の全身を包んでいた黒い装甲が一瞬にして粉と化して撒き散らされた。
「染み込んだテメーの精子、お返しするぜ……利子付きでな！」
「うおおおっ……!?」
舞い上がった粉は本来ならそのまま風に乗って消え去るのだが、精子と結びついたことで固まり礫となってロバート・チャールズに襲いかかる。
「今だ！ファラデー！」
チャールズがたまらず手を離した瞬間に、ロクショウが指示を飛ばす。
その叫びを受け、カスケードはツヴァイレイザーの引き金に指を置いた。
「行くぞファラデー！絶対に離すなよ！」
「了解！〝二重電磁砲（マキシマム・ザ・デュエット）〟！」
引き金が引かれ、ツヴァイレイザーから圧倒的な衝撃波が放たれた。
周りの木々を薙ぎ倒し、確実に迫っていく。
「よし……!?」

逃げようとしていたロクショウの腕を何かが掴むのが見えた。
「ロクショウ?!」
「仲間の武器でテメェが逝ケ!!」
礫から逃れたロバート・チャールズが腕を伸ばし、ロクショウを執拗に引っ張ろうとしていたのだ。
先程まで人間に近かったその顔は崩れ、醜悪な怒りを顕にしていた。
ファラデー達もそれに気づいたが、かといってこの破壊光線を止める事はできない。
チャンスは今しかなく、途中で止めれば本来の所有者ではないカスケードの命の保証もない。
「そんなに俺と一緒にいたいかよ……だったら!こっちからそっちに行ってやるよ!」
ロクショウは逆にロバート・チャールズの方へと走り出した!
当然ロクショウも逃れられなくなる、しかしそんなことは彼自身承知の上だ。
道連れにしようというのだ。
ロバート・チャールズは突然の反発力に虚を突かれ、わずかに前方によろめく。
その隙きを突いてロクショウはロバート・チャールズを羽交い締めにした。
「食らえェーっ!」
「ぐおおおおおー……!」
(何だ!?このエネルギーは!?電気か……炎か!いや違う!!)
直撃したことによる激しい激痛を紛らわすためか、その異様な感覚を分析していた。
ファラデーの持つ固有の超能力、〝ライディーン〟。
ステージ1は電気、ステージ2では炎を発し操る。
しかし、その本質はあくまで〝無からのエネルギー発生〟、この一点に尽きる。
圧倒的エネルギーは次第にオーバーフローし、周囲の熱を奪い始め

る。
（微かだがこれは……〝《《氷》》〟……!?）
ロバート・チャールズの体は弾け飛んだ。

「やった……のか？」
ようやく倒せた。
しかしファラデーが心配なのはロクショウの安否だ。
「ロクショウ！」
「あっ、おい！」
カスケードが静止する間もなく、ファラデーはロクショウを探しに駆け出した。
「ロクショウ……ロクショウ……！死ぬな!!」
「《small》死んでねぇ……」
「!!……ロクショウ～～～!!」
ロクショウの声が耳に入った途端、ファラデーの目から大粒の涙がドバドバと溢れ出した。
「どこだ？どこだ～～～～～?!」
「ここだ……俺は無事だぜ……あいつが盾になって直撃は免れた……」
「良かった……～～～～～い良かったぁ～ッ！」

泣きじゃくりながらロクショウを抱きしめた。
「泣くな！痛い痛い抱くな!!」
喜ぶのもつかの間、ファラデーやカスケードのヴァイタルコアに通信が入った。
その内容は――――隊長コーディンからの救難信号。
「隊長!?どうして街に……!?」
「あの隊長が救難信号を出すとは……よっぽどだぞ」
コーディンは最強の戦造人間だ。
これまで数多くの窮地を一人で乗り越えてきている。
そんな彼が救難信号を送ってくるという時点で既に異常事態なのだ。
「でもロクショウが……！」
「俺はほっぽといていい、先に行っててくれ……とても動けないんだ……救助ぐらい自分で呼ぶさ……」
「そ、そうか……」
「テルミット大丈夫か？おい、おい！」
カスケードは白目をむいて気絶しているテルミットの体を手で擦った。
「ん、ぅん……ハッ！リバース獣は!?」
「もう倒した！それより急いで戻るぞ！」
「え？戻るってなんで……」
「走りながら説明する！急ぐぞ！ファラデーも!!」
「お、おう！」

走り去るファラデー達の背中を見送った後、ロクショウは先程落としたヴァイタルコアに手を伸ばした。
「ぐ、あぁっ……痛ッ……！」
伸ばしたのだが。
届かない。

直撃していないとはいえ凄まじいエネルギー波を食らってしまったのだ。
全身打撲の
「あぁここまでか……選択ミスったなぁ……」
後悔はない、などと言う気などロクショウにはさらさら無かった。
トランスを庇うことなく一人逃げていれば生き延びられたかもしれない。
そうすれば良かったとさえ思っている。
しかし仕方のないことだ。
そうせずにはいられなかった。
こんな怠惰なロクショウでも、遺伝子レベルで守護の使命を帯びた戦造人間なのだから。
「些細な給与アップに吊られて選抜メンバーへの招集に応じたが……しくじったなぁ……こんなにも苦しい……ちくしょう……」
ロクショウはゆっくりと目を閉じ……そのまま地面に顔を伏した。

コーディンの前に立ち塞がったのは、かつてコーディンの幼馴染にして社長令嬢だったミセルだった。
その歪な姿を初めて見て、コーディンは動揺した。
容姿や年齢自体は全く変わっていない。
自分と同い年だったはずの彼女が少女のような姿のままでいることがかえって不気味だった。
それに対して、服装は完全に変わり果てていた。
身にまとっているそれは戦造人間が着用するヴァイタルコアとそこから生成される鎧繊維に酷似しているが、胸部に鎮座する媒体は緑色のヴァイタルコアとは異なり禍々しく赤い光を放っており、鎧繊維も全身を覆ってはおらず、露出が多い。更には、ボイルの乱から１０

年以上の月日を経てボロボロになっている。
それはコーディンの価値観からすると酷く映った。
かつてのミセルもそんな格好は好まなかったはずだ。
何よりもおかしいのは、その強さだ。
元は戦造人間ですらないただの人間であるにも関わらず、異様な強さ。
奇妙としか言いようがなかった。
昔の彼女を天使とするなら、今目の前にいるこの人物はまるで悪魔だ。
「どうしたのコーディン！最強なんじゃなかったの？ねぇ教えてよ、どうしてそんなに弱いの？ねぇ！」
徒歩空拳による攻撃がことごとく防がれたコーディンは、渾身の力を込めてフラクチュアを振り下ろす。
構えは素人のそれ、隙だらけのところに大技を叩き込む……はずだった。
しかし、ミセルの左手によって軽々と受け止められた。
「何……!?」
「フン……！利き手じゃあないのよ？」
「ぐおおおおおお……！」
ミセルがフラクチュアを捻じり回し、コーディンの右手首に凄まじい力が加わって骨が折れる音がした。
「ぐうう……！」
顔を俯けるコーディンを前に、ミセルは得意げに講釈を始めた。
「私もうあの日のミセルじゃあないわ！私とっても強いの！貴方達戦造人間なんかよりよっぽどね！この胸に埋め込んでいただいた回路のお陰……だってそうでしょ！貴方の１個前の隊長ボイルだって倒せたのよ！それに引き換え貴方、まだあの日のボイルより弱いんだぼぉっ」
しかし最後まで言い終わることはなかった。
ミセルが喋っている間に立ち上がり、間髪入れず残っていた左の拳で顔面にフックを食らわせた。

ミセルの口からポロリと歯が抜け落ちた。しかし、それに続いて起こった現象に対してコーディンは己の目を疑った。
幻覚であってほしいと願った。
抜け落ちた箇所から金属が析出し始め、歯を形成し始めたのだ。
生え変わりが早い等という話ではない。
全く別の物質に置き換わっている。
「あーあ、天然物の歯だったのに……貴方の知ってる昔の私の一部が消えちゃった」
コーディンは革新した。
かつての暖かみが感じられない掌。
光が消え失せた蒼い左目と、赤く輝くロボットじみた右目。
１０年以上の月日を経て、全身が未知の素材で機械化されている。
「君はもう……人ではないのか……？」
「うるっせーんだよオッサンが！砂でも食ってろ！」
「グッ!?」
みぞおちに蹴りを入れられ、地に倒れ伏すコーディン。
「くああ……！」
「あそうだ……まだある？昔私が直々に手当してあげたあのクソデカい傷」
ヴァイタルコアによって生成された戦造人間の鎧繊維を、いとも簡単に破き捨てた。
「あった？」
その傷は、コーディンが隊長になる前に受けたものだった。
かつてコーディンは上位種の討伐の任務を受けた。
本来なら訓練生に上位種討伐の任が与えられることはないのだが、コーディンは訓練生の中でも優秀だったため、特別にそれが認められた。
しかし、その隊は全滅した。
コーディンの所属する隊を壊滅させた敵こそ、〝ロバート・チャールズ〟と名乗る、極めて狡猾で残忍な生物だった。
快楽のためだけに拷問を受け、そのうち衰弱死すると思われたのか

捨てられた後、這いずって基地へと帰還したのだった。
その時に受けた傷はほとんど治っているが、胸部の傷は今でも残っている。
これまでにコーディンを打ち負かしたのはボイルとロバート・チャールズだけ。
そして今、かつて青春を共にした元社長令嬢によってその傷を晒されることによって3度目の完全敗北を喫した。
「グッバ～イ？」
ミセルが今にもコーディンの頭にフラクチュアを振り落とそうとしている。
さしものコーディンも、無防備な脳天にフラクチュアの直撃を食らえば頭骨が粉々になるだろう。
万事休すかと思われたその時だった。
「ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
反逆者として謹慎処分を受けたはずのゾルが突進でミセルを退けた。
「よぉ、隊長様」
その後を追うようにしてヤコブがコーディンのもとに駆け寄ってくる。
「勘違いするなよ隊長様。アンタを殺すのはこの俺だからな……」
ヤコブはコーディンに手を差し伸べる。
それは天使の祝福か。
弱りきったコーディンは、ついこの前自身に反逆した二人が救い主か何かのように感じた。
――しかし、ヤコブはそんな甘いヤツではなかった。
「てなわけで、今この場で俺に殺されてくれや」
鋭利な手刀がコーディンの喉笛に突きつけられる。
やはりこの男は、紛れもない悪魔でしかなかった。

第17話　時間よ、凍れ

第17話　時間よ、凍れ

かつて幼馴染だったはずのミセルに敗れ倒れ伏したコーディンの喉元に、ヤコブの冷たい手刀が突きつけられる。

「こんなにも早くアンタを機会が来るとはな……漁夫の利とはこのことだな、ヒヒ」

ヤコブがコーディンの命を狙うのも、何も今に始まった話ではない。

初めて顔を合わせたときから、コーディンに対する敬意など微塵も匂わせず、露悪的な態度でつい最近の謀反を起こして本部をかき乱した事件もこのが主犯格の一人だ。

「……ヤコブ。貴様この俺を殺すことに執着しているようだが、何がお前をそこまで突き動かす?」

「シンプルな話さ……俺のこの肉体を見ればよくわかるぜ」

ヤコブは自らの体を覆う黒い繊維の首元を力強く引っ張って胴体を見せた。

そこから見えるのは人間の皮や骨ではなく、剥き出しの機械回路だった。

「なるほど……お前は戦造人間ですらなかったということか」

「その通り!俺は耐久性不足で生産中止になった戦闘用アンドロイ

ド。戦造人間じゃあない。そんな俺が最強の戦造人間を始末して、利権を手にする。これが俺の計画だったのさ……面白いだろ？」

身の毛がよだつ邪悪な笑顔で見下ろす。

「データベースの改竄、ヴァイタルコアに標準搭載された自動身体検査の除去。アンタに近づくのには結構苦労したん……!?」

自身の計画を嬉々として語っていたヤコブだったが、その余裕は揺いだ。

コーディインの腕がピクリと動いている。立ち上がろうとしているのだ。

首に手刀を突きつけられているというのに？いつ首をはねられてもおかしくないというのに？

「立……ッ!?　動くな死に損ないがッ！」

「利権狙いか……本当にそうか？何かもっと大層な考えがあるように思えてならないが」

「……！」

コーディインは怯まない。既に敢然と立ち上がっている。

「……！おいゾル！その女のことはもういい！今はコーディインを……」

コーディインの見透かすかのような態度にたじろいだヤコブは話を逸らすかのように、ミセルとゾルに呼びかけるが、どうも様子がおか

しい。

唸り声を上げながらミセルの胸のコア〝邪心回路〟を掴み取ろうとしていた。

「何なのコイツ……！」

ミセルも困惑している。

指示を無視したその狂行にヤコブは痺れを切らし叫んだ。

「ゾル貴様――――――――ッ!!何をやっている!!ここに来た目的はコーディンを殺すことだ!!基地を乗っ取っての反乱がしくじった以上、これが最後のチャンスなんだぞッ！」

しかし、ゾルは全く聞く耳を持たず、依然として邪心回路をむしり取ろうとしている。

まるで、そこから発せられる赤い光に惹きつけられているかのようだ。

「おい……聞いているのか？」

怒りを通り越して不気味さを覚えたヤコブだったが、その状況には既視感があった。

（まさかトランスの暴走と同じ現象か……？いや、あれは何か違う……！）

「あばひゃあああああああああああああ!!」

一直線に突撃していくゾル。

「ワンパターン……」

見切られ、いいようにあしらわれている。

「じゃあね、クソ雑魚」

「お待ち下さい！」

二人の間に割り込んで止めに入ったのはヤコブ

「ちぃぃっ、ゾルめ、なんて使えない奴だ……！お前はもういい」

「グッ……」

当身を食らい、ゾルは気絶して倒れ伏した。

「いやぁ失礼お嬢さん……こいつはこのヤコブの下僕なんですがね、どうも役に立たなくて困る……見る所、貴女も戦造人間が憎くて仕方ないようだ。このヤコブもそう！そこで一つ提案があるのですが……この私を今ここで貴女の部下として引き抜いていただけないでしょうか」

「え……？」

その申し出にミセルは思わず呆気にとられた。

戦造人間でないとはいえバースコーポレーションお抱えの戦力部隊の一員。それがどうして急に掌を反すのか。それがさっぱり理解

出来なかったからだ。

「ミセル忠実な僕となりましょう！手始めに貴女に手を上げやがったこの糞野郎ゾルを止め！……そうすればそこにいる〝お前〟も満足する」

「何を言っ……て……？」

なにかに呼応するかのようにミセルの思考が遮らる。

そこに乗じてヤコブは宣言した

「俺の正体は……Ｙ―９２。お前と同じく〝ヌクリア〟によって造られた人工知能だ」

「……ヌク……リ……ア……」

従うべき主の名を表すその単語が引き金となり、ミセルの意識は完全に上書きされた。

「……そウか、オ前も……だったら話は別！是非お願いするわ」

コーディンは

「ヌクリアに造られたプログラム……だと……!?」

「冥土の土産に相応しいサプライズだっただろう？お前にもすぐにとどめを刺してやるよ……というわけでミセルお嬢様、ボイルを殺したとされる微細ミサイルを頂けませんか？」

「え？」

「威力が高い分、自爆を恐れてここぞという時にしか使わないのでしょうが、何分私はアンドロイド……危険な任務にうってつけです。綺麗な花火を上げてご覧に入れましょう」

このような申し出、普通なら受けない。相手が抜け目ない奴とわかっていれば尚更だ。しかし邪心回路の精神操作にあてられたミセルの脳はすっかり酩酊していたため、これを承諾してしまった。

「じゃあお願いしてみようかしら」

「ありがとうございます！では……テメェで味わいな」

「!?」

微細なミサイルを受け取った０．０２秒後、ヤコブはそれをミセルめがけて指で弾き飛ばした。

ミサイルそのものが瞬間的に加速、爆発。隊長クラスの戦造人間の直接的な死因となったその威力が彼女を襲う。

「おいお～～～い!!社長令嬢たるもの、おだてに乗ってないでもうちょっと用心をするもんだぜ！何年も彷徨ってたからお作法をお忘れになられちまってたかぁ？ギャハハハハハハハハハハハハハッ！」

ヤコブは勝ち誇って高笑いした。ヌクリアに施されたプログラムとは関係なく、天性の悪性から騙すことへの愉悦を覚えてしまっていたのだった。

「ご令嬢に用なんかねぇ！お前を我が物とさせてもらうぞッ！〝邪心

回路〝よ……!?」

伸ばした手が、止まる。

いや、止められたのだ。ミセルに掴まれて。

「な……なぜ生きて……!?」

「さっきの言葉は全て偽りだったのか……流石は〝邪心回路（オレ）〝の前身」

「ぐっ……うぅ……クソッタレがァァァァ!!」

ヤコブは、自由な左腕を振りかざした。

もう計略も何もあったもんじゃない。戦いの最中でどうしようもなく追い詰められてしまえば、最後に残るのは悪あがきしかないのだ。

ヤコブの体表面が鳥肌のように際立つと同時に、それらが一瞬にして纏まり刃が迫り上がる。全身を刃にし、力いっぱい振り下ろす。

だが無駄だった。

「ぬぅぅっ……刃が……通らない……!」

「悔しいでしょうなァ兄者……俺のようにもっと私の肉体強度を上げられれば」

「や、止めろ〝邪心回路〝!!俺達は……兄弟じゃあないか！お互い親愛なるヌクリア様によって造られたプログラム同士!!さっきのはほ

んの冗談だ！そう、アナタの力を試したんですよ!!やはりアナタこそワタクシめの主人にふさわしい!!……おい！止めろ!!こっちに来るんじゃあないこの化け物ッ!!本当に俺を殺す気か!!?!!」

「当たり前でしょ」

ミセルの指が頭部に突き刺さり、エネルギーを注ぎ込む。

「助け蜉ゥ縺代※縺上l縺。縺上@縺?≧縺?縺後〒縺ゅ〉縺?%縺薙→縺励←縺九◆縺ョ縺槭ｓ縺倥ｃ縺??縺??縺昴▲縺溘l縺√?縺」縺上≠縺」縺キ縺後?縺上@縺?≧縺励←縺??縺槭□縺医★縺峨。縺上→!!」

声になることなくバグった電子音を撒き散らしながら、ヤコブの体は木端微塵に吹き飛んだ。機械断面が剥き出しになった金属の塊が無惨な形状となって地面に落下していく様を、コーディンはただ見ていることしか出来なかった。

戦造人間が作り出されるようになった直後は、まだ批判の声が多

く、規制のためにリバース獣全体をまとめて相手取れる程の数を生み出すことが出来なかった。

そこで生み出されたのは戦闘用アンドロイド。代替品になり得ると、戦造人間反対派の期待を背負って彼らは戦場へと送り込まれた。

しかし、彼らの致命的な欠点が浮き彫りになってきた。彼らは耐久性の低く、また修理に必要な素材も高額だったのだ。それに比べて戦造人間の方は、バイオテクノロジーの著しい向上によって欠損した肉体の修復も容易になってきていた。

戦造人間を減らすために造られたはずの戦闘用アンドロイドは、皮肉にも戦造人間の強化によって生産中止に追い込まれたのだった。

そんな戦闘用アンドロイドの残骸に目をつけたのは、科学者ヌクリアだった。彼は装着者の肉体を強化すると同時に人格を捻じ曲げ、自らに都合のいい兵士へと変えてしまう悪魔の装置を密かに開発していた。

試作品の一つ、Ｙ９２をこっそり持ち出した戦闘用アンドロイドの残骸

エネルギーが空になっていたにも関わらず

その日からＹ―９２――――――――ヤコブはこっそりと戦造人間の部隊に潜入し、諜報活動を行うようになった。

戦造人間の必需品であるヴァイタルコアから生体スキャン機能をナーフし、またデータを改竄することによって自らが戦造人間ではないことがバレないようにした。

ある時には自らの肉体を改造して

しかし、ある日突然ヌクリアは死んだ。

プログラムに従って動いていたヤコブだが、何も感情が全く無かったわけではなかった。

ふと気付いたのだ。自分に大して忠誠心というものがなかったことに。

それ以降彼は目的を『ヌクリアのための諜報』『自らの成り上がり』に切り替えたのだった。

ファラデー、カスケード、テルミット、トランスの４人が駆けつけた。

「何が起こってるんだ……!?」

バラバラになってはいたが、辛うじてヤコブの顔の一部だと判別できる程度に原型が残ってはいた。

「ヤコブ……なんで……ていうか死ん……ッ」

ファラデーの不安を遮るかのようにカスケードが声を張り上げる。

「救助だ、救助信号を出すんだ！何百回でも連打しろ!!秒で来てもらわないと困る!!」

最優先すべき

「しかしあの少女はなんだ……？まさか彼女が敵なのか!?」

「あの顔なんかどっかで見たことあるような……」

戦造人間の部隊における区分は、『隊長』と『隊長でないもの』の2つだけと言っても過言ではない。それだけ隊長というものは別格の戦闘力を誇っているのだ。

その隊長であるコーディンが、たった一人の少女の前で叩きのめされ倒れ伏しているというのは、隊員達にとっては到底信じがたい光景だった。

「救助が来るまで持たねぇ！俺達で隊長を助けるんだ！」

「無理だよ！私達じゃ絶対に勝てない……隊長ですら勝てないような相手に……」

「テルミット……！」

「うおあぁーーーーーーーッ!!」

「ちょっとファラデー!?」

話を聞かず飛び出した。

「あら、戦造人間にしては小柄な子ね。あなたは何が出来るの？見せて頂戴」

「やってやるッ！まずこれがステージ1！」

電撃を纏った拳を目にも留まらぬ速度で連続して叩き込む。

「そしてこれが、ステージ2だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

電気が炎へと変わり、ラッシュの威力を増す。

ステージ1程の速さは無いが、代わりに一撃ごとの重さ、威力が増している。

「ありがとう、もう十分」

しかしその拳はミセルの細い腕に掴まれ、難なく受け止められてしまった。

「電気と炎、2つの力……面白いけど、一気に見せちゃうのは悪手じゃない？」

「うわっ……！」

「ファラデー！……ううっ!!」

トランスもファラデーを救うべく飛び出そうとするも、ロバート・チャールズとの戦いで前身に受けた傷が痛み、よろめいて地面に激突してしまった。

「行くなトランス!!もうファラデーはダメだ！残酷だが、隊長と無事な者だけで逃げるしかない……！」

「そんな……!?」

「うっ、ファラデーッ……!!」

トランスは絶望で顔を上げられない。テルミットも涙ながらにうめき声を上げている。

頼みの綱は軒並み倒され、万事休すかと思われた。

「……来た」

かすかなエンジン音を戦士達の耳が捉えた。

救助が来たのだ。

「お疲れ様、坊や。まず先にあっちから……」

救助に来たビークルを狙撃しようという魂胆のようだな

「……ちょっと待て!!」

「……ん?」

「確かに一気に見せるべきじゃなかったな……でも実はもう一つとっておきがあるんだ……見せてやるよ……ステージ……〝3〟……!!」

その宣言と共に、少しずつ腕の炎に変化が生じ始めた。

どんどん勢いを増していたが、やがてそれが止まり、

エネルギーがオーバーフローし、逆に周囲の熱を奪っていく。

周囲の空気が一瞬にして〝冷えた〟。

氷の塊の中に閉じ込めた

「……!!」

「今だーーーー!!皆逃げろ！逃げるんだァァァァッ～～～～～～～～!!」

響き渡るファラデーの声。

ミセルの全身のみならず、突き出した彼の両腕もまた氷塊の中に埋もれていた。引きちぎっての脱出も試みようとしたが上手くいかなかった。体温が奪われて力が出ないのだろうか。だから彼は自らの脱出は諦めて、仲間達を逃がすことだけを最優先としたのだった。

「

「ファラデー！」

「駄目だテルミット！隊長が最優先だ！」

「でも……」

「そうだァァ～!!俺よりも隊長を連れて行け～～～～～～～～ッ！ついでにゾルも……！」

ファラデーとコーディンの間には大きな距離があり、救出するのは非常に時間がかかるだろう。その間にミセルが氷を突き破って出てくる可能性を０と断じることは出来ないのだ。

コーディンを助け、ファラデーは見捨てる。全滅を避けるための合

理的な考えだ。

合理的なのだが――――心は納得できない。

「見捨てるなんて嫌だ……ファラデー！」

「テルミット！」

「俺は大丈夫！……必ず帰る、約束だ」

「……！」

テルミットは迷いを振り切り、コーディンの元へと駆け寄ってその体を両手で抱き上げた。

「約束破ったら……蹴り入れるよ……ッ!!」

涙ながらに捨て台詞を吐いて、搬入用ハッチからビークルに飛び乗る彼女の後ろ姿をファラデーは見送った。

「……」

カスケードとテルミットとトランス、コーディン、そして気絶していたゾル。

ファラデーとヤコブだった金属の残骸を残して一同はその場を後にした。

二人を閉じ込めた氷塊が遠ざかっていく。

「ううう……ファラデー～～～～っ！」

一度押し殺したはずの激情が溢れ出るかのごとく、テルミットは泣き出し始めた。

今でこそ彼女はスポーツマン染みた爽やかな少女といった印象だが、かつての彼女は足技以外の長所がないことに対するコンプレックスに悩まされていた。

ある時カスケードと出会い、同じようなコンプレックスを持っていた二人は互いの溝を埋め合うかのように打ち解けた。

生殖機能を持たない戦造人間にとって、二人の関係性は異常なものに映り、また本人たちもそれを自覚しつつも依存をやめられずにいた。

そんな雰囲気を変えたのが、突然間に割り込んできたファラデーだった。

（よっお二人さん！俺とチーム組んでくれない？俺、結構強いし役に立つよ）

（誰だお前？）

（よくぞ聞いた！俺の名はファラデー、今に世界中を痺れさせるニュースターさ）

（……なんだそりゃ）

（……いいんじゃない。二人だけより三人になったほうがいくらか有利だと思う）

（なんなんだお前！口ほどにもないじゃないか！）

（真の力はまだ隠してんだよ！）

（あーはいはい）

（おっ、また舌絡ませてんのか？よく飽きないよなー）

（キャッ!?）

（ノックぐらいしろこのボケ!!）

（アンタ電気なんか出せたの……助けてくれてありがと）

（だーから言ったろ？真の力隠してるってさ！）

（傷口に砂鉄ビッシリだけど）

（え？……ぎにゃあああああああああ!?）

（先が思いやられるぜ……）

過去の記憶を振り返り、泣きじゃくるテルミット。

ロクショウの安否は確認できず、ファラデーは置き去りになっている。ヤコブは死亡。

コーディン、カスケード、テルミット、ゾル、トランス。

残ったのは上記５名。

たった一人の少女によって、主力部隊は壊滅寸前に追い込まれたのだった。

「……ＵＪＹＵＡＡＡＡＡ……!!」

暗闇の中、敗れ去ったはずの魔獣が白い液体を滴らせながら再び立ち上がる。

自身を打ち破った戦士達への復讐心を燃やしながら。

「奴ら……このロバート・チャールズによくもこんな仕打ちを……待っていろ、直に思い知らせてやる……!」